
世界を渡る旅人...恋姫の世界で天魔龍の化身となる。

暴走マッド？

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界を渡る旅人…恋姫の世界で天魔龍の化身となる。

【Nコード】

N7676S

【作者名】

暴走マッド?

【あらすじ】

駄目な紙様（笑ノ誤字に有らず）との出会い、そして恋姫の世界にへと転生します。ノリと勢いとネタとetc…で乱世を翔けぬける！

おい、其処に正座しろ…当然、石の凸凹座布団と石の足掛を上に乗っけてな

「さつて、リリカ〇なのはDVDでも見て、早く特攻野郎〇チームのシーズン？でもみるか」

TSUTAYAから、リリカ〇なのは全巻を借りて、特攻野郎〇チームを買い、家に戻ろうと原付を運転をしていれば
ドガン！

あれ？車やバイクが無い筈なのに、なんで？

俺は空高く舞い上がり、自分の粉々になった原付を眺めて…

グシャー！！

まるでトマトを落とした様な音を響かせて俺…風祭京は22歳の若さでこの世を去った。

起きろ…起きろ…

…っ…あれ…俺は確か、原付で事故って…死んだはずじゃ…

声が聞こえて瞼を開けて上体を起こせば、顎鬚を長く足元まで垂らした爺さんが目の前にいた。

「…爺さん…誰？」

「ワシは、主ら人間が言うところの神様じゃ」

……はっ？この爺さんは何を言ってるんだ？自分で神って…精神異常者か？

「生憎、ワシは正常じゃよ。」

…心を読んでいるのか？

「そうじゃよ。ワシは又シの心を読んでおるのじゃ」

…って事は、この爺さんが神だと仮定しようだが…此処は？

「此処はこの世とあの世の狭間、創造の間じゃよ。」

そう言い、爺さんが地面から椅子を2脚生やせば片方に座った。

「…なんで、地面から椅子が生えたんだよ。これも神様のスキルなのか？」

「いや、此処は想像すれば創造できる間じゃ…と、言っても普通の物に限るがの…」

神様からの言葉を聞きながら空いている椅子に座れば、試しに自分の座っている椅子の脇に緑茶が乗っているサイドテーブルイメージを頭に思い浮かべれば、頭のイメージ通りに緑茶の乗ったサイドテーブルが生えてきた。

「…凄いな…でも、何で神様がこんな一介の人間に会いに来てくれたんだ？」

俺が何気なく疑問に思った事を聞けば、神様だと名乗る爺さんが顔を背けた。

「…おい、何で顔を背ける？」

「それがの…ワシが下界を眺めながら、酒を飲もうとしたんだが…手を滑らせて、又シの進路上に杯を落としてしまったの…それに当たった又シが事故を起こして死んでしまったのじゃよ。」

「…ちよつと待て、このジジイ、今なんと…」

「…じゃから、ワシが下界を…」

「…ようは、お前のドジで俺が死んだと言う事だよな？」

「…そうじゃよ。」

「…ほお、このジジイ…」

「…だから、わぎゃ!?!」

気が付いていたら考える暇なく、立ち上がって神を殴っていた。

「ほお…よおはこの俺が死んだのはお前のせいか…覚悟は出来てるか？」

「ちよつと…悪かったと思ってるから、ちゃんと謝りに来てるんじゃないか…」

しどろもどろになる神を見下ろし、拳を鳴らせばとてもいい笑顔で浮べた。

「さて…覚悟は出来てるか？」

そう蹴りと同時に言えば、石の座布団と重りを頭に浮べた。

「ぎゃー！ちょっと！これは洒落にならないって！」

「洒落にならないのは、お前のドジで儂く散った俺の命だ。」

現在、何をしているかだつて？それは当然、SE・I・ZAで、O・HA・NA・SHI中

「これって拷問だよね！江戸時代に行われていた奴！」

凹凸の付いた石の座布団の上で正座をさせられて、その脚の上に石畳を置かれた紙様（笑）は、何とか石畳をどけてもらおうと懇願しているのだが…

「気のせいだ。俺も似た様な事をやられたが、本当にキツイからな…」

そう言い、紙様（笑）の膝の上に乗っている石畳に勢い良く脚を乗っければ、脚に力を込めた。

「ぎゃー！本当にすいません！お詫びに転生先と能力をプレゼントしますから！」

紙様（笑）からの魅力的な提案を聞き、石畳から脚を退ければ、膝の上に乗っかっていた石畳を下ろした。

「ああ…死ぬかと思った。」

「殺してやるうか？」

「ゴメンナサイ！」

石畳の上で土下座をする紙様（笑）を睨みつけながら神様が生やした椅子に座れば、脚の痛みから解放された紙様（笑）が空いている椅子に腰掛けた。

「で、どんな能力が欲しいんじゃ？」

「方天戟の天武の才、あとは限界突破と記憶の引継ぎの三つをくれ」

「…意外と謙虚なのだな…もっととんでもない能力を寄越せと言われるかと思っていた。例えば、某奪還漫画の眼が欲しいとか」

「…世界観を壊すのは粹じゃねえ…で、行く先は恋姫無双の世界で、容姿は俺が言う奴らが惚れる容姿を頼むな」

「…なんじゃ、ハーレムを気付く気か？」

「まっ、何処かの種馬みたいに無作為ハーレムじゃないだけまだマ

シ？だろ…で、俺が言う奴ってのがな…」

「星、凧、恋、焰那、華雄か…解った…なら、行ってらっしゃい！」
紙様（笑）がそう言うと、俺の頭の上に金盞が落ちて来て

ゴガアーン！

「じ…ジジイ…後で、覚えてろ…」

そう眩き、俺は意識を失った。

おい、其処に正座しろ…当然、石の凸凹座布団と石の足掛を上に乗っけてな

どうも、暴走マッド？です。これは処女作です。心の広い方は読んでください。優しい方は感想を下さい。

現世である程度自由に過ごして風祭 京、しかし…駄目紙様のドジのせいで死んでしまった。駄目神紙様を殴って蹴って、脅して、いくらかの能力を貰って転生する事に。

そして、転生した世界は剣や槍の打ち合う音が響き、矢が飛び交う乱世の一步手前の漢王朝末期、転生した京は転生する前以上に自由に、好き勝手に恋姫の世を翔けぬける！

おい、其処に正座しろ…当然、石の凸凹座布団と石の足掛を上に乗っけてな

「さって、リリカ〇なのはDVDでも見て、早く特攻野郎〇チームのシーズン？でもみるか」

TSUTAYAから、リリカ〇なのは全巻を借りて、特攻野郎〇チームを買い、家に戻ろうと原付を運転をしていれば
ドガン！

あれ？車やバイクが無い筈なのに、なんで？

俺は空高く舞い上がり、自分の粉々になった原付を眺めて…
グシャー！！

まるでトマトを落とした様な音を響かせて俺…風祭京は22歳の若さでこの世を去った。

起きろ…起きろ…

…っ…あれ…俺は確か、原付で事故って…死んだはずじゃ…
声が聞こえて瞼を開けて上体を起こせば、顎鬚を長く足元まで垂らした爺さんが目の前にいた。

「…爺さん…誰？」

「ワシは、主ら人間が言うところの神様じゃ」

……はっ？この爺さんは何を言ってるんだ？自分で神って…精神異常者か？

「生憎、ワシは正常じゃよ。」

…心を読んでいるのか？

「そうじゃよ。ワシは又シの心を読んでおるのじゃ」

…って事は、この爺さんが神だと仮定しようだが…此処は？

「此処はこの世とあの世の狭間、創造の間じゃよ。」

そう言い、爺さんが地面から椅子を2脚生やせば片方に座った。

「…なんで、地面から椅子が生えたんだよ。これも神様のスキルなのか？」

「いや、此処は想像すれば創造できる間じゃ…と、言っても普通の物に限るがの…」

神様からの言葉を聞きながら空いている椅子に座れば、試しに自分の座っている椅子の脇に緑茶が乗っているサイドテーブルイメージを頭に思い浮かべれば、頭のイメージ通りに緑茶の乗ったサイドテーブルが生えてきた。

「…凄いな…でも、何で神様がこんな一介の人間に会いに来てくれたんだ？」

俺が何気なく疑問に思った事を聞けば、神様だと名乗る爺さんが顔を背けた。

「…おい、何で顔を背ける？」

「それがの…ワシが下界を眺めながら、酒を飲もうとしたんだが…手を滑らせて、又シの進路上に杯を落としてしまったの…それに当たった又シが事故を起こして死んでしまったのじゃよ。」

「…ちよつと待て、このジジイ、今なんと…」

「…じゃから、ワシが下界を…」

「…ようは、お前のドジで俺が死んだと言う事だよな？」

「…そうじゃよ。」

「…ほお、このジジイ…」

「…だから、わぎゃ!？」

気が付いていたら考える暇なく、立ち上がって神を殴っていた。

「ほお…よおはこの俺が死んだのはお前のせいか…覚悟は出来てるか？」

「ちよつと…悪かったと思ってるから、ちゃんと謝りに来てるんじゃないか…」

しどろもどろになる神を見下ろし、拳を鳴らせばとてもいい笑顔で浮べた。

「さて…覚悟は出来てるか？」

そう蹴りと同時に言えば、石の座布団と重りを頭に浮べた。

「ぎゃー！ちょっと！これは洒落にならないって！」

「洒落にならないのは、お前のドジで儂く散った俺の命だ。」

現在、何をしているかだつて？それは当然、SE・I・Z Aで、O・HA・NA・SHI中

「これって拷問だよね！江戸時代に行われていた奴！」

凹凸の付いた石の座布団の上で正座をさせられて、その脚の上に石畳を置かれた紙様（笑）は、何とか石畳をどけてもらおうと懇願しているのだが…

「気のせいだ。俺も似た様な事をやられたが、本当にキツイからな…」

そう言い、紙様（笑）の膝の上に乗っている石畳に勢い良く脚を乗っければ、脚に力を込めた。

「ぎゃー！本当にすいません！お詫びに転生先と能力をプレゼントしますから！」

紙様（笑）からの魅力的な提案を聞き、石畳から脚を退ければ、膝の上に乗っかっていた石畳を下ろした。

「ああ…死ぬかと思った。」

「殺してやるうか？」

「ゴメンナサイ！」

石畳の上で土下座をする紙様（笑）を睨みつけながら神様が生やした椅子に座れば、脚の痛みから解放された紙様（笑）が空いている椅子に腰掛けた。

「で、どんな能力が欲しいんじゃ？」

「方天戟の天武の才、あとは限界突破と記憶の引継ぎの三つをくれ」

「…意外と謙虚なのだな…もっととんでもない能力を寄越せと言われるかと思っていた。例えば、某奪還漫画の眼が欲しいとか」

「…世界観を壊すのは粹じゃねえ…で、行く先は恋姫無双の世界で、容姿は俺が言う奴らが惚れる容姿を頼むな」

「…なんじゃ、ハーレムを気付く気か？」

「まっ、何処かの種馬みたいに無作為ハーレムじゃないだけまだマ

シ？だろ…で、俺が言う奴ってのがな…」

「星、凧、恋、焰那、華雄か…解った…なら、行ってらっしゃい！」

紙様（笑）がそう言うと、俺の頭の上に金盞が落ちて来て

ゴガアーン！

「じ…ジジイ…後で、覚えてろ…」

そう眩き、俺は意識を失った。

こんな父親の子供になったら、絶対にぐれるか精神的にタフになる（前書き）

あんな父親を持ったら絶対にサブタイトルの通りになります。

こんな父親の子供になったら、絶対にぐれるか精神的にタフになる

「おぎやー！ー！（あの紙様（笑）殺す！」

あの紙様（笑）によつて金盃を頭に落とされて恋姫の世界に転生した俺は、第2の人生を始めたのだが…

「煉火！遂に我が子が生まれたのだな！」

眼の前に髭もじやのむさ苦しい男が居たのだ。……ええ、只の髭もじやのむさ苦しい男ならまだ良いさ…だがな、

「爽！貴方の姿を見せないで！折角の尊い命が失われるでしょ！
ぐしゃ！」

俺を抱き上げる女の人に、棒状の何かで殴りつける程の似合わない露出の高い女の服を着た醜い姿は勘弁して欲しかった…

「おぎやー！ー！ー！（嘘だあー！あんなんが父親だなんてー
ー！）」

ええ、叫びたいですよ。あんなのの遺伝子が入ってる何て…

「よしよし、あんな醜い物体を見て怖かったろうね。」

そう言い、壁に何かを立てかけ優しく頭を撫でる手付きの持ち主を見ようと顔をそちらに向ければ、睨んでいるかの様に鋭い目付きの銀系の美女が居た。

「で、爽…暫く、この子の視界に入らないで…」

「酷くないか…煉火…せっかく真名を考えて来たのに…」

「酷く無い、貴方のその姿を見て何人の子供が泣いてきたと思ってるの？早く貴方の考えた真名を教えなさい」

容赦なく切り捨てれば、優しく撫でていた頭から手を離して立てかけていた、方天戟を手に持った。

…って、言うより潰れたのに復活するなんてどんだけなんだ…

「煉火の様に強く、龍の様に強くなつて欲しいから、煉龍ってのは
どうか？」

「変態の癖に良い真名を考えましたね。…初めまして煉龍、貴方の

お母さんですよ。」

そう言い、俺を顔の近くまで持って行き、父親？であるモノと違い優しく微笑んでくれた。

「あう〜（願わくば、父親になのは性別だけにしてくれ…）」

「安心なさい、男の子って母親似になるのよ？」

「あうう？（俺の言ってる事が解るのか？）」

「あんなのが父親って知れば、誰だってそう思うわよ。…安心なさい、煉龍」

…じゃ、俺の言っている言葉が解る訳じゃないんだ…

「あうう〜（しかし、あれと何で結婚したんだ？）」

「あら？何か言いたいのか？」

うん…やはり、言葉は通じてない…

「くわあっ…」

「眠たくなったのね…お休み、煉龍」

恋姫の世界に転生して1日…母親の容姿がかなり良く、父親似には絶対に似たくないと思った。

あれから5年…我が家の力関係は母・超えられない壁・俺・超えられない壁・恋

こんなタイトルですが、父親は少ししかでません。

あれから5年…我が家の力関係は母・超えられない壁・俺・超えられない壁・亦

あれから五年…えっ、時間を飛ばし過ぎだった？

…最初の1年は聞かないで下さい…授乳期間は黒歴史です。絶対に墓までこの思い出を持って行く。

で、後の4年は何で飛ばすかって？…俺に近づこうとする変態（父親）を武器で吹き飛ばす毎日…あつ、また、変態が空を飛んで居る…今日は昨日より飛んだな…

「煉龍、変態は遠くに吹き飛ばしたから、話をしましょう」

方天戟を肩に担ぐ母さんの元へ直に行けば、母さんは俺の手を引き、家の裏にある蔵にへと向かった。

「煉龍：貴方もそろそろ、鍛錬をし始めてもいい年になったので、今日から鍛錬を始めるわよ。蔵の中から好きな武具を取りなさい。」

そう言い、母さんが蔵の扉を開け、俺を中に引き入れれば、俺は眼を疑った、蔵の中は武器・武器・武器…と武器で埋め尽くされていた。

「さっ、煉龍…好きな武器を選びなさい。」

……………えっと、何処の武器屋さんですか？

「煉龍、どんな武器が良い？剣？槍？それとも手甲？」

呆然とする俺を置いて、母さんは、少し嬉しそうな表情で様々な武

器を挙げていった。

「…で、煉龍…何にするの?」

「なら、母さんと同じ武器にする。」

「嬉しい事を言うわね…同じ戟だと、徹底的に鍛え(扱ける)られるわ。」

…今、何か不吉な単語が…

「母さん…今、何と…」

「徹底的に鍛え(扱ける)られるだけど?」

不吉な単語は副音声で聞こえたー!!

「安心なさい、殺しはしないけど…気を抜いたら死ぬわよ?」

…ちょっと待って、ようは殺す気で鍛錬をするって事…

「…あの…母さん、なんでそんなに厳しいの?」

「それは、母さんみたいに強くなって欲しいからよ。…さっ、早く好きな戟を取りなさい。」

…駄目だ。これは実際に鍛錬をしないと…

俺は誰にもわからない様にため息を吐き出して、近くに有った戟を手を取った。

あれから5年…我が家の力関係は母・超えられない壁・俺・超えられない壁・恋
少し見やすくなりました。…感想をいただけると嬉しいです。

俺は確かにチートですが…バグキャラじゃありません。…母さんは間違いないが

主人公はチートです。

父親は変態です。

そして、母親はバグキャラです。

…モブキャラと母親が対決したら、母親無双が発生します。

俺は確かにチートですが…バグキャラじゃありません。…母さんは間違いなくバ
今現在、庭にて母さんと対峙しています。…何で対峙しているかっ
て？それはKE・I・KOと言う名の肉体言語をしようとしている
からです。

「さっ、気を引き締めなさい、煉龍」

対峙するのは毎日変態と言う名の父親を空へと飛ばすチート級の強
さを持つ母親…

「…えっと、普通は素振りとかから始まるんじゃないの？」

「何を言ってるの？母さんの子なんだから、母さんとは実戦形式の
稽古しかないわよ。………命がけの…（ボソッ）」

ちよつと待つてください、今最後の方が小声で聞き取りづらかった
んだけど…絶対にまともな台詞じゃないよね？

「さて、無駄口は此処までにして…いくわよ。」

言い終わる瞬間、母さんが武器を振り上げ、一瞬でこちらへと距離
を詰めた。

ちよつ！ちよつと待て！

ガギーン！

俺は冷や汗をかきながら、上段から振り下ろされる方天戟の斧を両

手を使い受け止めた。

「あらっ…かなり手加減をしたとはいえ、瞬牙を受けるなんて凄いわね。」

鏢迫り合いをしながら余裕の表情で話す母親に対し、俺は話す余裕は無かった。

ちょっと待て…俺は紙様（笑）から、戟の天武の才を貰ったぞ…幾ら、大人と子供でも、俺は才能でそこらの大人には負けないはずだぞ…

「あら？結構余裕そうね。…なら、もう少し本気を出しましょう」

ガッ！

脳が…何で…

俺が最後に見た光景は、片腕を振り上げている母親の姿だった。

…驚いた。かなり手を抜いたとはいえ、初撃を受け止められるとは…

私は先程気絶させた自分の息子をジッと見つめた。

今日、武器を持ったばかりの子が私の一撃を受け止めた事に未だに信じられなかった。

「爽…貴方の事なんですから、最初から見てたんでしょ？」

私は振り返らずに、背後に立っている爽（変態）に声をかけた。

「まあ、最初から見てたけど、煉火の瞬牙を初見で受けたのはビックリしたけどね。」

「ええ、大抵はあれで終わるから」

「だけど、その大抵にはいない人達ってどこぞの猛将とかでしょ……」

「だけど、当然よ。私の子なんだから……」

「……さすがに、同情するよ。まさか、煉火の地獄の扱きを5歳の時から受けるとはね。」

転生者、風祭 京…恋姫の世界に転生して5年、此処から死にたくなる様な地獄の生活が今、始まった。

俺は確かにチートですが…バグキャラじゃありません。…母さんは間違いないが

…転生して、天武の才があるからと言って、地獄を避けられるもの
ではありません。

大体十数年…バグキャラの母親の地獄すら生温い生活が今、始まり
ます。

死んだ方がマシだ！これは鍛錬と言つ名の拷問じゃない！鍛錬と言つ名の私刑だ
お待たせしました。
主人公は幾らチートでも、絶対に母には勝てません！何故なら、母
の愛とはそう言つものなのです

死んだ方がマシだ！これは鍛錬と言つ名の拷問じゃない！鍛錬と言つ名の私刑だ
…恋姫の世界にへと転生し、遂に母親に稽古（拷問）をつけて貰う
事になりました。…で、どんな感じなのかと言つと…

月曜日

ドガッ！

「ぐっ！」ほっ！「ほっ！」

「起きなさい、煉龍…稽古を始めるわよ。」

寝台の近くには弓と大きな100本程の矢が納まっている矢筒を背
負った母、煉火の姿があった。

「…か、母さん…け、稽古つて…」

「今日は食料調達を兼ねて弓矢の対応をします。」

「…もし、対応できなかつたら…？」

「矢で射殺されます。」

…ちょっと待て、これが腹を痛めて産んだ息子に対するものか…

「では、いきますよ。…死にたくなかつたら…死ぬ気で避けなさい。」

そう言い、ゆっくりとした動作で弓を肩から取れば、背に背負っていた矢筒から弓を取り出し…

「ちよっ！死んでたまるかー！ー！」

俺は寝巻きのまま、飛び起きて村の近くにある森にへと逃げ始めた。

ヒュウ！！

ちよっ！今、頭をギリギリのところ掠ったぞ！

俺はこれ以上の矢に晒されない様に森に入れば、息を整え木に背を預けた。

「…何なんだ…厳しいなんてレベルじゃ済まないぞ。」

「それだけ、煉火は煉龍に期待してるって事だよ。」

「あっ、変態」

「…実の父親相手に酷いな」

「父親と言われたかったら、その変態な格好をやめて普通の格好になれ」

俺が背を休めていた木の近くの茂みから変態（父親？）が頭を出して喋りかけてきた。

「さて、煉龍、変態…そんな所で、話しているなんて余裕ですね。」

「…おい、変態…何で、母さんの声が上から聞こえるんだ？」

「…それは、煉火が木の上で、弓を引き絞りながら話しかけているからだよ。」

「……………」

ヒュン！カツカツ！

「ちよつと待て！何で2本同時に撃てるんだ！」

「まあ、煉火は色々と規格外の人間だからね。」

「規格外の一言で済ますな！」

月曜日の朝、俺は変態と一緒に母に射殺されるストレスになるまで森の中で逃げ回っていた。

火曜日

ドゴン！

「かはっ！？」

「起きましたか？煉籠」

「かつ…母さん」

「さて、今日は刀剣類に対処する為の特訓をするよ。」

「…せ、せめて、朝食の後にして…」

「何を言ってるの？朝食の前に稽古をしますよ。」

そう言い、煉火が腕を背に伸ばし

スラァン…

「ちょっと待て…これって、昨日にも同じ事を…」

「問答無用」

ブォン！

…ちょっと待て、この時代の刀剣類って、鋼を使って無い筈なのに、
何で簡単に寝台を真っ二つに…

寝台から飛びのき、刀を振り下ろした後の自分の寝台を見れば、見
事に真っ二つになっていた。

「さて…まずは、寝込みを襲われた場合の刀剣類の対処の稽古を始
めるわよ。」

そう言い、煉火は煉龍に切りかかってきた。

俺の対応………規格外の母親に対する行動は只一つ、時間一杯まで
逃げる事しかなかった。

水曜日

火曜日はどうなったかって？……答えは簡単、1日中、刀を持った母親に追い回されていましたよ。例え、方天戟を持っていても……結果はそんなに変わらない結果になっていただろう

「はっ!？」

ヒュン!ドガァン!!

「おや…気配はちゃんと殺しておいたのに気付くとは…」

目の前には寝台を戦斧でたたき付け、少し驚いた表情を此方にむける母の姿があった。

「…えっと、今日は…」

「話が早いですね。今日は戦斧の対応です。」

「…まさか、要領は昨日と同じなんて…」

「ええ、まだ稽古(拷問)を始めたばかりですから、逃げなさい。」

そして、俺と母との(一方だけの)命がけの鬼ごっこをした。

死んだ方がマシだ！これは鍛錬と言つ名の拷問じゃない！鍛錬と言つ名の私刑だ

… 厳しいですが、この母親… 孫には… やっべ、孫にも同じ対応しそ
う… いや、俺は信じる！ きっと孫には大甘だと！

あつ、感想くれたら嬉しいです。

死んだ方がマシだ！これは鍛錬と言つ名の拷問じゃない！鍛錬と言つ名の私刑だ

こんな生活をしたら、絶対に4日目で駄々をこねそう

死んだ方がマシだ！これは鍛錬と言つ名の拷問じゃない！鍛錬と言つ名の私刑だ

木曜日

えっ…水曜日はどうしてたかつて？ずっと逃げてましたよ。才能は幾ら天武の才のチートを持っていても、武器なしで、経験豊富なバグキャラが相手では勝てないです。

どがああん！！

「がっ…げほっ…」

「…全く、昨日はちゃんと避けたのに、今日は避けれないなんて…」
部屋の扉の付近で、呆れた様に煉龍を見ながらため息を吐きながら、煉火は突き出した拳を下ろせば、ゆっくりと近づいた。

「煉龍…起きなさい。今日は気を使う相手の対処です…時間は有限なのですよ。早く起きないと、もう一発、打つわよ。」

ちよ…ちよつと待て！この母親…本当にバグキャラだ！気も武器も使えるって！

蹲っている煉龍は、苦しそうなうめき声を上げれば、もう一発気を喰らいたくないため、立ち上がった。

「…さて、呼吸を整えたら、武器を取りに行きなさい…何時までも逃げていては強くなりませんよ。」

煉火は息子に自分の武器を取りに行く様に言えば、煉流は逃げられなかったら、母の言うとおりに強くなれない事が解ったのか、大人しく自分の武器を取りに蔵に取りに行けば、蔵の前には変態が居た。

「おや、煉龍…こんな朝早くから煉火と稽古かい？」

「…母さんが、逃げてばかりだったら、何時までも強くなれないから、武器を取りに行きなさいって…」

「って、事は少しは体力が付いたって事だよ。」

「体力が付いた？そんなに簡単に体力はつかないよ。」

「でも、煉火がそう言うって事は付いているんだよ。」

俺は変態の言葉を軽く聞き流しながら蔵にしまっていた自分が選んだ方天戟を手に取れば、母さん呼びに自分の部屋にへと向かった。

「さて、稽古を始めますよ。」

煉龍が部屋に戻り、煉火を呼んで庭に行けば、煉龍は方天戟を構えるが、煉火は両手から力を抜いて、自然体で対峙した。

「…母さん、構えないの？」

「構えたら、腕に余計な力が入るでしょ。」

「…なら、行くよ！」

そう言い、煉龍は一気に距離を縮めて、突きを繰りだせば、方天戟の槍先は見えない壁に突き刺さった様に、自分と煉龍の間で止まった。

「なっ！？」

「気には内功と外功の二つが有り、外功はこの様に壁として張る事も、この様に…」

そう言い、煉火が煉龍に拳を突き出し、気弾を煉龍に放つも、煉龍はギリギリで気弾を避ければ、背後から響く爆音を聞き、冷や汗を流した。

「なっ…」

「気弾を放ち攻撃する事も出来る。」

「…ちよつと！今のって確実に当たったら大怪我するよね?!」

「鍛錬に怪我はつき物です。」

…駄目だ。この母親に常識と自制と言うのが全く無い

「さて、次に…内功と言うのを体で説明をします。」

肉体言語でのO・H A・N A・S H Iですか…

「内功とは体の各部に気を巡らせて、体を強化する事です。…こんな風に」

そう言い、煉火は消えた。いや、眼にも映らない速度で、煉龍の懐にもぐりこみ

トトトトトトトツッ！

「かはっ！？」

ちよ…この連撃は…！

煉龍は、煉火からの連撃を受け、5m程吹き飛ばされた。

「身体能力を上げる事が出来ます。」

せめて、肉体言語でのO・H A・N A・S H Iじゃなくて、カカシか何かで見せて欲しかった。

金曜日

木曜日は飯と小休止以外は、気で強化されたバグキャラ（母親）から、肉体言語のO・H A・N A・S H I・気絶・叩き起されるのスパイラルを体験していました。

「しっはっ！？」

ちよっと待て…腹にくるこの衝撃は？！

「起きなさい、今日も朝から鍛錬するわよ。」

今日もですか…母さん…

「…で、今日はどんな鍛錬ですか？」

「今日は、気配を絶った私との手合わせです。」

「…ちょっと待て、今でさえ何とか防げているのに、気配を絶たれがっつ！

「対峙しているのに、考え事とは余裕ですね。…良いでしょう。今日は食事を抜きにして、徹底的に扱ってあげます。」

「ちょ！母さん！」

「問答無用」

土曜日

金曜日は木曜日よりも酷かったです。飯抜き・休憩抜き…死ぬかと思いました。

「はっ！？」

ベットから勢い良く眼を覚まして部屋の出入り口に顔を向ければ、ただ立っているだけの煉火が居た。

「おはよう、煉龍」

「おはよう、母さん…今日はどんな鍛錬をするの？」

「前みたいにひたすら、武器を交える鍛錬ではありませんから、安心なさい。」

良かった。あんな鍛錬を毎日されたら、絶対に死ぬ…

「今日は、兵法や政治などの勉学をします。」

「うん…解った。」

訂正…肉体と頭を徹底に扱われて俺は1年も持たずに死ぬかも…

日曜日

土曜日はどうなったかって？…勉強・勉強…トイレに行く以外は寝るまで勉強でしたよ。身体を動かす鍛錬よりもきつかった。…寝たら、容赦なく頭に鉄拳が降ってくるんだから…

「はっ!？」

「おはよう、煉龍」

「おはよう、母さん」

「朝食が出来たわよ。早く来なさい。」

「…今日は鍛錬は無いの？」

「6日間、良く頑張ったから今日は身体も頭も休む日よ。…今日は、

存分に甘えて良いわ。明日からはまた、6日間鍛錬するから覚悟しなさい。」

「うん！今日の朝ごはんは？」

「今日は焼き魚よ。早く着替えてらっしゃい。」

そう言い、煉火は部屋から立ち去った。

…恋姫の世界に転生して、大変だと思つてたけど…

「精神は大人だけど、やっぱり母さんに甘えられるのって嬉しいな」

そう呟き、俺は手早く着替えて家族と一緒に朝食を食べに行こうと向かった。

死んだ方がマシだ！これは鍛錬と言つ名の拷問じゃない！鍛錬と言つ名の私刑だ
なんか最後は少し暖かい感じになりました。そして…次の話で遂に
原作に突入します。

あれから10年過ぎました。…えっ？飛ばし過ぎ？…この10年間は1週間、
ついに原作キャラ達と会う事になりました！

そして、間違いのご指摘がありましたので、編集をして直しました。

あれから10年過ぎました。…えっ？飛ばし過ぎ？…この10年間は1週間、鍛錬を始めてから10年程経ちました。

えっ？時間を飛ばし過ぎ？…この10年、ずっと鍛錬と言う名の地獄を味わいましたよ。しかも慣れません。強くなれば母親が徐々に手加減を止めるので、全く強くなった気がしません。紙様（笑）から本当にチートを買ったのかと何度疑問に思った事でしょうか…

自室でぼろっと少し考えて居たら、気配を感じ部屋の出入り口に視線を感じれば、真剣な表情を浮かべている煉火が立っていた。

「煉龍、大事なお話があります。来なさい。」

そう言い、煉火は立ち去り、煉龍は母を追う様に部屋から出て行き、今にへと向かった。

今には席に座っている母と変態（父）が居たので、煉龍も空いている席に座った。

「煉龍：貴方も15になったので、そろそろ人殺しの重みを知って貰います。」

…この母親、今なんと言いました。

「と、言うわけで麓の村から賊の討伐依頼が来ているので行きますよ。」

「ちょっと待って！？何でいきなりそんな事をするの？それと近く

に村があつたの？」

「何を言ってるの？今着ている着物も米もそこで手に入れているのよ。」

「煉火：今までずっと鍛錬していて、村に連れて行っていない煉龍が村の存在を知る訳無いと思うんだけど」

変態（父）のツツコミを聞き、あつと言う表情を浮べれば、俺と変態（父）からジト目の視線を受け、母は少し気まずそうに視線を逸らした。

「…この様子だと、真名以外は教えていないでしょ？煉火」

「……………」

「はあ…村に行く前に、少し常識を教える必要があるみたいだ。」

変態（父）の更なる質問を聞き、無言で顔ごと逸らした煉火を見て、変態（父）がため息を付けば、煉龍に視線を向けた。

「まずは、普段呼んでいる名は真名と言って、神聖で自分が認めたい人間以外には呼ばせてはいけない名前だからね。もし、認められていないのに呼んだら斬り殺されても文句は言えないから」

「…えっ、じゃあ普段はどういう風に呼んで居るの？」

「姓と名、後は字があるから、普段はそれらで呼び合ってるから…ちなみに、俺は姓は藍名は藍名は虎字は牙だから。」

…変態な格好（露出の高い女性服）をしてなかったらどんなに良かったか…

「私は姓は藍名は桜字は澄だ。」

「…で、俺の名と字は？」

勢い良く視線を逸らす母親をジト目で睨み付ければ、変態（父）がため息を吐き出した。

「煉龍の名と字は、名は覇、字は鳳だからね。」

変態（父）から、漸く姓名・字を教えて貰えば、母親がわざと大きく咳払いをし、雰囲気を変えた。

「で、本題に入ります。…煉龍もそろそろ15になり、軍に仕官する事が出来る年齢になりました。…それに、最近是不穏な風ばかりし、不吉な星が空を覆いつくしているので、人の命の重さを知るべきなのです。」

先程の気まずそうな雰囲気消してそう告げる母には、何処か確信めいた物があった。

「多分、1年以内…大きな乱があります。きっと…この大陸に広まる大きな乱が」

「だから、今のうちに命の重みを知る必要があるって事？」

「そう言う事です。では、行きますよ。煉龍」

「いつてらっしや〜い」

「ちよつと！いきなり過ぎるって！」

「問答無用」

母親のその言葉と共に俺は意識を失った。

「知らない天井だ。」

目を覚ましたら知らない天井が見えました。だから、一度言ってみたかった台詞を言ってみました。

「何を言ってるんですか？煉龍」

母親からの突っ込みを受け流して起き上がれば、いきなり首根っこを掴まれて、猫の様に運ばれていった。

「村長、息子が起きました。」

「おお、藍澄さん…ちようど良かった。実は旅の者で、賊の討伐を手伝ってくれると言う人達が居るのでな、顔合わせをすると良い。」

「そうですね。煉龍が初めてなので、人手が多いのに越した事は無いですね。」

「では、入ってきてもらおう。」

そう言い、村長が一旦部屋から出て行き、3人の女性を伴って戻ってきた。

うえっ!?!?...この3人ってまさか...

「始めまして、我が名は姓は関、名は羽、字は雲長」

「初めまして、私は姓は劉、名は備、字は玄徳」

「鈴々は、姓は張、名は飛、字は翼徳なのだ。」

...まさか、蜀の猛将とその領主と会うとは...

あれから10年過ぎました。…えっ？飛ばし過ぎ？…この10年間は1週間、
間違いのご指摘ありがとうございます！
作者は未熟者ですので、もし、間違いがありましたら、ご指摘をお
願いします。

そして、ついに次の話で原作に突入します！

肩には命の重みを、心には武人の覚悟を、手には武器の重みを、進む道には死者
戦闘描写がとても下手です。…もっと、上手くならないと…

そして、間違いを編集しました。

肩には命の重みを、心には武人の覚悟を、手には武器の重みを、進む道には死者

どうも、煉龍です。原作の中心キャラの劉備・関羽・張飛と出会いました。

「では、村長さん…賊の規模を教えてくださいませんか？」

「はっ、はい…賊の規模は大体600人程の規模です…この村には、近くの村を襲いながら向かってきています。」

「…なる程、この村の自警団の人数は？」

「お恥かしいながら、この近隣はとても治安が良く、村の自警団は30人程で…自警団も、まともに武器を扱える物は5名程です。…扱えるとしても、弓だけで…」

「解りました。愛紗ちゃん、鈴々ちゃん…村の人達を守ってあげて。」

「はっ、桃香様…我が青龍偏月刀で賊等、一振りの元で斬り伏せてみせましょう。」

「賊なんて、鈴々が残らず蹴散らしてやるのだ。」

「なる程…では、私達4人で賊を討伐します。村の者達には決して部屋から出ない様に伝えてください。」

「はあ!?!ちよつと待て!」

「ちよ…母さん！たった4人で600人の相手をしないといけないの!？」

「ご婦人、この者は？」

煉龍の非難の声を聞き、愛紗が眉を潜めて睨み付ければ、煉火は片手で煉龍を制した。

「この子は私の子です。…申し送れましたが、私は姓は藍名は桜字は澄と言います。煉龍、自己紹介をなさい。」

「初めまして、姓は藍名は霸字は鳳です。」

「…なら、藍鳳殿は、村の出入り口を警護していただければ結構です。」

おっ、関羽さんともありがたい事を

「関雲長、この賊討伐は息子の鍛錬なので、この子も最前線に連れて行きます。」

ですよ〜うちの母さんはスパルタだって泣いて命乞いをして逃げ出す程厳しい方なんですから、

「ですが、このような初陣の者を最前線に連れて行く等自殺行為としか！」

「生憎、この子は賊に殺される程軟な鍛え方はしていません。」

「…解りました。」

煉火の有無を言わさぬ雰囲気に愛紗はため息を吐きながら食い下がれば、煉龍は諦めた様にため息を吐き出した。

「で、母さん…この討伐にはどんな意味があるの？」

「出来れば、自分で考えなさい…解らなかつたら、終わった後に教えてあげます。…それはそうと行きますよ。」

そう言い、煉火は方天戟を担いで愛紗達より一足先に賊達との戦場に向かった。

「全く、何を考えてるんだあの者は…」

先に戦場となるで在ろう場所に向かった煉火を見送りながら愛紗は深くため息を付く姿を見て、煉龍は苦笑しながら近づいた。

「母さんも悪気がある訳でもない、意味が有るんだよ。だから、そんなに母さんの悪口を言わないでくれるかな？」

「しかしだな…」

「気軽に藍鳳つて呼んでくれると嬉しいな…母さんと変態以外と初めて話すんだから」

「藍澄殿はともかく、変態とは？」

「あつ、それは気にしないで」

「…ともかく、初陣の者を連れてくるのはあまり感心はせぬ。」

「母さんは厳しい人も泣いて逃出す程厳しい人だから…それと、先に行くね。後で話そうね。」

そう言い、煉龍は愛紗から離れて母を追う様に戦場となる場所に向かった。

…今此処には俺・煉火・関羽・張飛の4人が武器を構えて賊を待ち構えていた。

「…さて、話によると一人、150人…少しキツイですがやりますよ。」

「ええ、ですが…逃げる訳には行きません。私達の背後には力無き民達が居るのですから」

「そうなのだ」

しかし…なんでこうも平然と話してられるんだ？

「煉龍、少し気を抜きなさい。」

方天戟を肩に担ぎ、視線を賊が来るであろう方角を見ながら煉火が煉龍に声を掛けた。

「…ですが、緊張する事は良いことです、ですが…し過ぎは良くないですよ。安心なさい、貴方は母さんの地獄の稽古に10年も耐えたのですよ。」

「…ちよつと待て、この母親、自分の稽古を地獄って自覚していやがった。」

「…ちよつと良く、賊が来た様ですね。」

そう言い、土煙が上がる方向に視線を向ければ、地面が動いていた。

「…チヨイ待て、良く見たらあれは地面じゃねえ…」

「情報は大きく間違っていますね。あれはざつと見て3000人近く居ますね。…まっ、大丈夫でしょう」

「…一人750名ですよ。」

「うう〜鈴々でもキツイのだ〜」

「さて、煉龍：貴方でしたら、1000名はいけるでしょう…いけなかったら、1週間で1日に纏めた修行を3ヶ月します。」

「…初陣の人間いきなり無茶な事を言わないで欲しいよ。」

ため息を吐きながら、武器を肩に担いだ。

「…例え、どんなに困難な敵がいようと逃げる訳にはいかない…関雲長！推して参る！」

「突撃！粉砕！勝利なのだ〜！！」

おお〜なんとも勇敢だ事…

「ぼお〜つとしてないで、早く行きなさい」

そう言い、俺と母さんは関羽達に続いて、賊の大群にへと挑んでいった。

「しねえ〜！！！！」

つう！これが本当の戦場か！

母との稽古とは比べ物にならない本気の雰囲気を感じ取るも、俺は切りかかってきた賊を切り伏せた。

うっ…これが人を斬る感触か…

必死になって吐き気を堪えながら斬りかかって来る賊を切り伏せ続けながら周りを観察した。

愛紗 side

くっ…こんなに賊が居るとは…！だが、逃げる訳にはいかぬ！私の背後には桃香様や力無き民が居るのだ！

「はああ〜！！！！！！」

斬りかかる賊を倒しながら、私は村を守る為に減らない賊を斬り続けた。

鈴々side

うう〜こんなに多いと大変なのだ〜

「にゃにゃにゃにゃ〜!」

だけど、桃香お姉ちゃんの夢を叶える為に鈴々は頑張るのだ〜!

煉龍side

凄いな、さすが猛将…だが…

どがあーーん!!

はっはっは!!人がゴミの様に飛んでるZE!

バグキャラ
煉火により吹き飛ばされて数を一気に減らす賊を視界の片隅に治めながら、母親から地獄の折檻（鍛錬）との死亡フラグを回避するために賊を成敗していれば、徐々にだが賊はその数を減らしていった。

「これで、最後ーー!」

俺は最後の賊を斬り、肩で呼吸をすれば、戦っている最中に我慢していた吐き気を抑えず吐いた。

肩には命の重みを、心には武人の覚悟を、手には武器の重みを、進む道には死者

凄く難しいですね…戦闘描写

さて、賊の討伐は終わっても、この話は終わりではありません。

後半により煉龍が真の意味の武を自覚し、武人として自覚めます。

肩には命の重みを、心には武人の覚悟を、手には武器の重みを、進む道には死者
…感想待っています。
(管理画面を見ては、膝を付いて落ち込み)

肩には命の重みを、心には武人の覚悟を、手には武器の重みを、進む道には死者

…気持ち悪い…これが人を殺すって感覚か…

「ぐっ…げぼっ！ごぼっ！」

戦いを終えた俺は今、討伐した賊の死体の中で吐いていた。

「煉龍…どうですか？初陣は」

「母さん…俺…俺…」

「ええ、人を殺しました。」

厳しいな、母さんは…俺が目を逸らしていた事実を容赦無く付き付けるんだから…

「…ですが、その感情を忘れないで…もし、その感情を忘れ、力無き者を蹂躪する様になれば、^{ケタモノ}獣に…戦いに悦びを見出して、戦いの中でしか生きられない様になったら、^{シユラ}修羅になります。…煉龍…貴方は死ぬまで、自分が殺した人の分まで人として生きなければなりません。」

そう言い、煉火は吐瀉物で汚れた煉龍の首根っこを掴み、強制的に立たせれば睨みつけ、煉龍の頬を力一杯張った。

「貴方はこの藍桜澄の自慢の一人息子よ！逃げる事！媚びる事！落ちる事を許しません！誇り高く、^{まな}真名の通り、誇り高く人として生きなさい！」

「なら…母さん…一つだけ教えて…武人って…何？」

「武人とは、己が武に誇りに持ち、強者と正々堂々と戦い、獣にも修羅にも落ちない強い者の事です…」

「…じゃ、武人じゃなかったら？」

「何処かの主君に仕えていたら、文官…もし、そうでなかったのなら、民です。」

母さんは何で俺にこんなにも苦しい生き方をさせるんだ？

「貴方は何故、自分がこんな苦しい道を歩むのか疑問に思っ
て居るかもしれませんね。」

「うん…」

「己が知を養い、文官を目指せば確かにこの苦しい思いはしないで済むかもしれませんが…ですが、私は煉龍には、真名マナの通りに生きて欲しく、そして…人の醜い部分を見せたくないのです。」

「人の醜い部分？」

「…それを知るには煉龍はまだ早く…言葉で知るより己が眼で、己が肌で感じ取る必要があります。…さあ、一先ず…村に帰りますよ。」

そう言い、煉火と煉龍は方天戟を肩に担いで村にへと戻っていった。

「藍澄さん、ありがとございます。お陰でこの村の平和はありがとございます。」

「ううん、皆の笑顔を守るのは私達の使命だから」

俺達は今、村長の屋敷に集まり、村長からお礼の言葉と食事を振る舞いを受けていた。

「そうです。私達は力無き民を守るのが使命なのですから」

…何だろう？劉備の言葉にとても違和感を…いや、違和感しか感じない。…原作を確かやった事はあるが…その時も、俺は確かに違和感を感じた。

「所で、藍鳳は何であんなに強いんだ？」

愛紗から声を掛けられて、煉龍は考え事を中断をすれば、問われた言葉を理解すれば、遠い目つきになった。

「…毎週6日間、死んだ方がマシだと思っ位の鍛錬を母さんにつけられているからね。」

「…確かに、藍鳳の母上は異常な強さだった。」

「異常なんて…そんな生温い言葉では納まらないよ。母さんは」

そう言い、俺と愛紗は母さんに視線を向ければ、視線に気付いた母さんは深くため息を付いた。

「関雲長、煉龍…人を化け物の様な眼で見るのは辞めなさい。」

「母さん、母さんの前じゃ化け物も子犬みたいに感じるんだけど…」

「…煉龍、帰ったら覚悟しなさい。」

「えっと、藍鳳君大丈夫？顔が白いよ。」

母からの死の宣告を聞き、顔を真っ青にすれば桃香が心配する様な目付きで俺に視線を向ければ、優しい言葉を掛けてきてくれた。

「…大丈夫じゃないと思う？」

「そんなにお母さんとの鍛錬って厳しいの？」

「…あれを厳しいと言ったら、世の中の大抵の事はとても優しく感じる。」

「…一体、どんな鍛錬をしているのだ？藍鳳」

「月曜には狩りと平行して屋避けの特訓、火曜には刀剣に対する対処、水曜は戦斧で、木曜は気で、金曜は気配を完全に消して、土曜は勉強…で、日曜に唯一の休み」

「…当然…朝ごはんを食べてからだよね？」

「えっ？何を言ってるの？劉備…朝、母さんが部屋に入った瞬間からだよ。」

「……………もし、お母さんが入って来たのに気付かなかったら？」

俺の1週間を聞き、顔を引きつらせて、青い顔で劉備がそう問い掛

け、関羽が顔を引きつらせ黙って俺の1週間の予定を聞いていた。

「文字通りたたき起こされる。武具を使う鍛錬の日は武器を使って」

「…それでよく生きていたね。」

「最近は特にそうだよ。…最近は完全に習慣になっっているから、峰や刃じゃない部分じゃなくて、刃の部分で叩き起こそうとしてるか
ら。」

お陰で最近ベッドじゃなく、床の上で寝てるんだよね。

「それはたたき起こすのではなく、たたき斬るでは？」

「ええ、それも起こすのではなく、眠らすなんですけど…永遠に」

今、振り返っても良くこの年まで生きていけたなと感心しています。

「…さて、そろそろ家に帰りますよ。」

これ以上、自分の起こし方？を話題に上げられたくないのか、そう
言々と煉火は席を立った。

「藍桜殿、本日は本当にありがとうございます。」

「いえ、当然の行いをしたままでです。」

そう言い、煉籠も慌てて席を立ち煉火に続いた。

「関羽、劉備：それと、あんまり喋らなかつたけど、張飛：また、

何処かで」

「ええ、また何処かで」

「バイバイなのだ」

「またね。藍鳳君」

そして、俺と劉備達は別れた。

……俺も彼女達を見て、ある決意を抱いた。…明日、母に話すと
決め。

肩には命の重みを、心には武人の覚悟を、手には武器の重みを、進む道には死者

漸くスタートラインに立ちました。これで漸く原作に突入できる。

それと、こっちもあんまり更新していないと言つのに、別の小説を書こうとしています。

案は

- 1 リリカルなのは
 - 2 バカとテストと召還獣
 - 3 ネギま
- うっん…どれも必ずアンチが有るな…きつと…

この時代の15歳ってもう立派な大人だね。 …あれ？早い人は12歳で結婚！

あう…感想が痛いですが…ですけど、とても嬉しいです。

つくつくかました皆様、ありがとうございました！

この時代の15歳ってもう立派な大人だよ。…あれ？早い人は12歳で結婚し、賊の討伐から数日…俺は、劉備達と出逢ってから武人とは何なのだろう？と考える様になった。

「鍛錬の途中で考え事とは余裕ですね…もう少し手加減を止めても構わないわね。」

ちよつと！今で何とか精一杯、自分の命を守れたのにこれ以上本気を出されると！！

ガン！ガン！ガギイン！！

煉火の突き・なぎ払いを何とか方天戟を盾にして防げたが、石突を使つての力チ上げで持っていた方天戟を飛ばされ…

ピタツ！

「煉龍…村から帰つて来て、鍛錬に集中出来て無いようですね…そんな調子だと、鍛錬で命を落としますよ。」

脳天に方天戟の斧の部分に触れさせる様に寸止めしながら注意すれば、ため息を吐きながら方天戟を引いた。

…確かに、帰ってきてから母さんの鍛錬に考え事をしては、今みたいな事が何回も有ったな…ちよつど良い、今切り出すか…

「…ねえ、母さん…俺、家を出て世の中を見てみたいんだけど…」

「何時…出るの？」

「…早くて明日」

息子からの急な旅の申し出を聞き、母は軽く息を吐き出しては背を向け、家にへと向かった。

「…解りました。今日の鍛錬はこれで終わりです。」

母のその一言で、今日の鍛錬を終えれば、煉龍も家に帰り明日の旅にへと帰っていった。

…俺もこの世に転生して15年だし…精神年齢も加えると35か…
外の世界を見てみないと…じゃないと、今が原作のどの辺りかって解らないし…あつ、やべつ…気付いたら俺、魔法使いじゃん…気付いたら気付いたらで凹むな…

明日の準備をしながら、ため息を吐き出せば、思わずこの世界に転生してから過ごしたこの家での思い出を思い出した。

母さんの息子として生まれ、変態が父だと知り落ち込み、変態が空を飛び見るのを毎日の日課とし、母さんに弓矢で殺されかけ、母さんに刀で殺されかけ、母さんに戟で殺されかけ、母さんに気で殺されかけ、母さんに拳で殺されかけ、母さんとの長時間の勉強でキツイ思いをし……あれ、この世界に転生してから、母さんに殺されかけた思い出しか頭に浮かばない…

「煉龍、ごは…って、何で泣いているの？」

夕飯を告げに来た爽（変態と言う名の父親）が見たのは、泣きながら旅の準備をしている煉龍だった。

「…母さんに殺されかけた思い出しか無いなと思っていたら、気が付いたら涙が…」

「…大丈夫だよ。まだ、鍛錬なら諦めがつくよ。」

ため息を吐き出しながら爽（変態と言う名の父親）が遠い目で言えば、少し意味深な事を言った。

「…ちょっと待って、鍛錬ならってどう言う意味？」

「煉龍が生まれてくる前は、少し機嫌が悪いつてだけで八つ当たりを受けたり、お肌の調子が悪いつてだけで、吹っ飛ばされたり、目当ての武器が先に売られてただけで、地面に埋められたり…」

初めて、自分の父（父と言う名の変態）の偉大さを知った。

「…そんなに酷い目に何度も合ってるのに何で離縁しないの？」

「…どんな事をされても、父さんは母さんを愛しているからね。…それに、母さんはね、照れ隠しで僕を吹っ飛ばす事とかも良くあるしね。」

…姿は変態だけど、このリア充が！モゲてしまえ！…あつ、モゲたら俺は生まれて来なかったか…

照れくさそうに笑うムサイ女装した変態を見ながら、煉龍は冷たい目で見ていれば、変態がいきなり何かによって叩き潰されていた。

「…爽、貴方は何時までかかって居るの？」

「…こんな生活をしていて、本当に良く生きてるよな、俺もこの変態も…」

「煉龍、何か言いました？」

「気のせいだと思うよ。母さん…早く、ご飯を食べよう」

そう言い、叩き潰された変態を放置して、食事を取るために居間へと向かった。

「…それで、煉龍…貴方はまずは、何処に行くつもりなの？」

「決めてない、まずは東を目指して歩いてみる。」

折角、恋姫の世界に転生したんですから、色々と見て周りたいたいしね…それに、二つ名とか欲しいし…

「…適当ですね。私はてっきり何処かの主君に仕える為に旅をする物だと思っていました。」

呆れた様子でため息を吐いては、何を言っても無駄だと思い再び、箸を進めた。

「それに、旅に出るのは仕官先を探すだけじゃなくて…この前会った、劉備達の言っている言葉を確かめるためなんだ。」

原作でも、黄巾の乱は幾らか紹介されていたな…それに、三〇無双

でも最初のステージだったけど、この辺りの奴って詳しくは描写をされてなかったな、腐敗を極めとか、民は困窮しただけで簡単に済ませていたからな…

「あの者達の言葉ですか…私からしてみれば、あの者達は浅いですね。」

「…浅いですか…？」

「ええ…これは貴方が旅をして見つけなさい、本当の敵は何か、本当に討たなければならぬのは何なのか、本当に戦うべきものは何なのかを」

「…解った。」

「煉龍…戦いなさい、生きるという事は戦う事なのです。」

…完全に種の台詞じゃねえか…母さんは知っているのか？

「解ったよ。…俺は確認してから寝るね…明日は早いから…」

俺は早々に立ち上がって自分の部屋にへと向かった。

…あっ、やべ！部屋には変態だった物がある…はあ、明日の準備の前に掃除をしないと…

この時代の15歳ってもう立派な大人だね。 …あれ？早い人は12歳で結婚！

…って、言うより漸くです。漸く、行動を開始しました。

さて、次回の更新は…日曜に出来れば良いな…多分、出来ないけど

…多分…こんな駄作者ですけど、厳しい感想などまっています。

褒めてくれますと伸びます？(まで

今更ながら、主人公の設定…おい、作者…普通は最初に書くのだろう…はい、

今回は、主人公の設定です。随時更新します。

今更ながら、主人公の設定…おい、作者…普通は最初に書くのだろう…はい、そ

姓 藍らん 名 霸は 字 鳳ふう 真名 煉龍れんりゅう

容姿 中肉中背の普通の容姿だと本人は思い込んでいるのだが顔立ちは母親譲りで割と整っているのだが、目付きがとても悪く、普通に行っているのに関わらず睨んでいるかの様に鋭く悪い、髪型は魏延と同じ髪型だが、黒の部分が銀、黄色？の部分が黒となっている。身長は比較をする対象が居ないため、本人は普通と思っているが178と割と高い。

武器 天龍戟

通常の方天戟とは違い、槍の側面に処刑鎌の刃と斧の刃、石突に鎖付きの拳大の分銅が付いている。そのため、大型武器の弱点の隙を極力減らしている。

戟に這う様な1匹の龍の装飾が施されており、刃にちゃんと銘が振られており、処刑鎌の部分に龍爪、斧の部分に龍牙、槍の部分に龍角、分銅の部分を龍尾と名づけている。

性格 楽観的で独自の価値観、独自の判断基準、人の好き嫌いで正義にも悪にもつく、そして、母からの言葉で、物事の本質を見ようとし、物事の浅い部分で判断する人を嫌う。時折、前世の記憶の漫画等のネタを体現しようと2度目の人生を謳歌しようと前向きな考えを持って居る。

好きな人物には甘く、嫌いな人間には割と厳しい

(随時更新)

今更ながら、主人公の設定…おい、作者…普通は最初に書くのだろう…はい、
大体、こんな者です…素材は9…1で、母親似です…父親似は…あ
んまり、想像したくないです。

旅のお供に馬が欲しいです…えっ、隣にいるじゃないかって？いえ、これはキ

…主人公はチートです。そして、馬もチート？です。

旅のお供に馬が欲しいです…えっ、隣にいるじゃないかって？いえ、これはキリ
旅に出る当日、煉龍は何時もより早く目を覚ました。眼を覚まして、
旅の準備を始めた。

…はあ…結局、昨日は変態だった物の後始末と血で汚れた部屋の掃
除で準備が出来なかったな。

え〜っと…保存食1週間分に、水筒、路銀、砥石、天龍戟、地図…
後は毛布っと…これで大丈夫かな？無かったり、不便だったりした
ら、何処かの街で買えば良いし。

「こんな物だな」

準備した物を大き目の鞆に入れ、天龍戟に括り付けければ、煉龍は静
かに部屋から出て行った。

「おはよう、煉龍」

家を出ようとする煉龍に、煉火が玄関で声をかけた。

「おはよう、母さん」

「煉龍：最後に一言だけ言います。…武人として生き、人として生
きなさい…」

何時もは凜としている母親の決意のある悲壮感を漂わせる声を煉龍
は黙って聞き続けた。

「もし、貴方が賊や獣けだものに身を落としたら…私がこの手で殺します。」

…旅に出る息子に言う言葉かよ…いや…母さんらしいか…人として、
武人として育てたのに…賊になっちまったらな…それに、討伐出来
るとしたら、母さんだけかもしれないし…

母からの旅に出る息子に対して厳しい言葉を聞き、苦笑すれば煉龍
は煉火に抱きついた。

「ありがとうございます、行ってきます。」

母から離れ、家を出れば煉龍は数度名残惜しみながら背後を振り返
りながら旅にへと出た。

…此処、何処？

家から出て数時間、やはり人の脚では限界があります。

肩に天龍戟を担いで、天龍戟にくくり付けた鞆を揺らしながら、草
原を歩いていけば、辺りを見れば見渡す限りの草原が広がっていた。

「…やっぱり、中国って広いな…」

自分以外の誰も居ない草原で煉龍はそう呟き、荷物を揺らしながら
街があるう方向に向けて歩き続けた。

数時間程度じゃ、街には行けないか…

ため息を吐き出し、歩きながら眼前に広がる草原を見れば、馬の群
れがのんびりと草を食んで居る光景に触発され、腹が空腹を訴えて
きた。

「…俺も飯を食べるか」

その場に腰を下ろして、天龍戟にくくり付けている鞆を外し、鞆から保存食を取り出せば、馬の群れから一匹の白い馬が煉籠に近づいてきた…

………うおい！ちょっと待て！これってあれだ！モン○ンのキリンじゃねえか！

近づいてきた馬を見て、取り出した保存食を手に持ってポカ〜ンとした表情を浮べていた。

…ちょっと待て、しかもサイズが可笑しいだろう！普通の馬がポニ〜ンに見えるぞ。黒○号かよ！…いや、こいつは真っ白だから、白王号か…

自分の眼前にまで来た白王号を啞然とした表情で黙って見続けていれば、白王号は首を下げ…

パクツ…モグモグ

…おい、この馬公…人様の飯を横取りしやがって…

モグモグ

…よし、決めた…この馬公を馬刺しにして食ってやる。

「馬公…てめえの罪を数えろ」

荷物を天龍戟から外し、立ち上がると同時に

「ぐふう！？」

白王号に体当たりされ、吹き飛ばされた。

煉龍を吹き飛ばした白馬号は煉龍の荷物を漁り、荷物の中に入っている保存食を食べ始めた。

ブツッ

「こつんの馬公！めて馬刺しと保存食にして食ってやる！」

食い物にすると宣言し、白王号との距離を一気に詰めて、頭に斧を勢い良く振り下ろせば、

「なっ！げふっ！」

ちょー！この馬！見切った上に反撃しやがった！？

再び、白王号に体当たりをされて吹き飛ばされれば、白王号は勝ち誇った様に目を細め

ぶるるる

ブチ！！

「上等だぁー！この馬公！」

天龍戟の分銅を白王号に投げつけければ、首だけを動かして最小限の動きで避ければ、二度体当たりを仕掛けてきた。

「そう何度も喰らうか！」

上にジャンプして体当たりを回避したのを煉龍が確認し、相手の背に龍角で刺そうと構えようとするも、すぐに天龍戟を盾にする様に前に突き出し

ガギーン！

「この馬公…下手な人間より強い…」

白王号の後ろ脚での蹴りを防ぎ、距離が離れれば煉龍は母親と対峙する気持ちで白王号と対峙した。

「はぁー！ー！」

掛声と共に龍尾を投げつけ、数瞬後に白王号に向けて駆け出せば、突きを繰りだせば

ヒュン！ヒュ！

白王号は余裕と言った雰囲気醸しだして避ければ、後ろ足だけで立ち上がり、前足での蹴りを繰り出した。

「甘いんだよ。」

天龍戟を半回転させて、石突でカチ上げて腹を叩けば、白王号が反撃とばかりに前足で煉龍を踏みつけようとした。

「くっ…簡単にくたばる様に鍛えられてねえんだよ。」

あの地獄より恐ろしい10年を何とか死なずに過ごせたんだ甘く見るなよ！

1時間後

「はあ…はあ…」

「フーフー」

この馬…馬の癖に手こずらせやがって…

一人と一匹は上がった息を整えながら互いを睨みつけ、次の一撃で全てを終わらそうと力を溜めていた。

「この馬刺しがあー！ー！」

「ブルヒヒーーン！」

互いに正面からぶつかり交差して、通り抜ければ一人と一匹は互いに数秒程硬直し…

ドザア…

「勝ったぞおー！ー！ー！」

「

白い巨体が地面に伏した音を聞き、勝者である煉龍は天龍戟を高く掲げて勝鬨を上げた。

「しかし…この馬…やけに強いな…馬じゃなくてやっぱ、キ○ンじ

「やねえかのか？」

煉龍はそう呟き、馬に近づけば白王号は悔しそうに煉龍を睨みつけた。

「…かなり強気な馬？だな…しかし、お前にほとんどの食料を食われたんだ…で、俺はお前に勝ったんだ…」

おつ、この馬…俺に負けたと聞いて悔しそうだが、渋々と言った雰囲気で自分の背に視線を向けた。

「渋々といった雰囲気だが…これからは俺がお前の主だ。…それと…名前を決めないとな…」

さて…何が良いか…黒王号の白だから、白王号……もつと良い名前を考えよう…白くて大きいし…強いからな…しろ・びやく・はく……それに、馬の王者って風格があるからな…王・皇帝・帝…あつ、俺の文字も入れたら、なんかよくな？

「これからのお前の人生（馬生）は俺の物だ。…よろしくな、白鳳^{はくほう}」
そう言い白鳳の背を撫でれば、白鳳は自分の名前が気に入ったのか、少し嬉しそうに耳を揺らした。

「さて…白鳳…お前に飯を食われたからな…少し休んだら、お前には働いて貰うからな」

煉龍はそう告げれば、白鳳の背を枕に草原で昼寝をし始めた。

旅のお供に馬が欲しいです…えっ、隣にいるじゃないかって？いえ、これはキリ
煉龍は馬？を手に入れた（タララッタッタ／＼FFの戦闘勝利の音）
ぶっちゃけ、この馬…普通の馬よりかなり大きいです。道産子とまごを更
に大きくして、真っ白になったものが、白凰です。

村だ！戦だ！義勇軍だ！…ちょっと待てー！俺は腹が減っているんだ！飯をくついにフラグを建てるー人目との出会い。

時系列についてはツッコミはしないでください。

村だ！戦だ！義勇軍だ！…ちょっと待てー！俺は腹が減っているんだ！飯をく
白鳳との昼寝から目覚めた俺はカバンの元へ行き、カバンを漁って
無事な食料が無いかと確認を最初にした。

「…なんとか1日分は残っていたか」

カバンの奥にあった無事な食料を見て、眉間にシを寄せれば深くた
め息を吐き出し荷物を纏めれば、天龍戟に荷物を括り付けて白鳳の
元に戻った。

「さて、白鳳：お前に喰われた俺の飯の分、早速働いて貰うぞ。」

そう言い、立っている白鳳の横に立てば、戟の石突の部分を地面に
突き刺して、棒高跳びの要領で飛び乗った。

「…大きいから高いと思っていたが…予想以上に高いな…白鳳、人
の居る所を知っていたら、其処まで頼むな」

白鳳に乗って見る光景に感嘆の言葉を思わず呟けば、白鳳任せで旅
を再開した。

「…しかし、広いな…地平線が何処までも続いている。」

前世での記憶にはこんな遙彼方まで地平線を見渡した記憶が無く、
ちょっとした感動を白鳳に揺られながらしていれば、俺はある事に
気づいた。

「…やべ、どうやって暇を潰そう」

どうやら、俺に乗っている人間は寝てしまったみたいだ。微かな寝息と俺の鬣に息を感じる。最初会った時は小さい奴と見くびって、あの人間の食料を奪った。そしたら、あの人間は怒って、武器を俺に向けたから体当たりで吹っ飛ばした。

普通、俺に体当たりをされたらしばらく動けなくなるのに、あの人間はなんにも無かったかの様に立ち上がって、俺に攻撃をしてきた。あの人間からの攻撃を避け、今度は全力で体当たりをした。…これで暫くは立ち上がってこないだろうと思ったら、また立ち上がってきた。

…何故だ？俺はこの草原の覇者だ。人間が何人で来ようが、俺は吹き飛ばして逃げ切る自信があるし、かなり昔に俺を捕らえに来た人間を体当たりで殺した事もある。…だが、あの人間は俺が体当たりしても何事も無く立ち上がってきた…

頭では考えながらも、その人間を見ていたら、鉄球を投げて来たので、避けて勢いのついた突進で吹き飛ばそうとしたが…あの人間は、跳躍して俺の突進を避けて、上から俺を攻撃しようとしていた。

…その時、俺は確信した…俺の背後に敵意を持って立っているものは居ない、必殺の後ろ蹴りを繰り出せば、その人間は俺の蹴りを防ぎ、立っていた。

…何故だ？この人間は…何故、死なぬ？そして、俺は何故、この人

間に危機感を感じる？

人間が俺を刺し殺そうとしたので、後ろ足で立ち上がり、前足で蹴ったのだが、あの人間は俺の蹴りを避けて…

ドゴツ！

俺の腹に攻撃をいれて来た。

くっ…潰れる！

俺は足元に居る人間を踏み潰そうとするが、脚が地面を踏みしめる感触しか無かった。そう、敵対する者を踏み殺した感触は無かったのだ。

そして、俺と人間は戦った。

…強い、この人間は間違いなく強い、俺よりも強い…俺の攻撃は尽く避けられ、あの人間は一方的に俺に攻撃を当て続けた。

「この馬刺しがあー！ー！」

せめて！一撃！この人間に立てぬ一撃を入れてやる！

俺は叫び、足にもう立てぬ程の力を入れて走った。そしたら、あの人間も俺に向かって走っていた。

俺の全力を受けてみる！

俺と人間は正面衝突はしなかった。…あの人間は俺の腹の下を通り…攻撃を一撃入れ…後ろにへと駆け抜けて行ったのだから…

俺はこいつには勝てないのか？！

俺は初めて地に倒れた…俺が他の者に散々舐めさせた辛辣の苦き思
いを…

この近づく！小さき人間にだ！舐めさせられたのだ！

俺はその人間を睨みつけた。…勝負に負ければ、殺されても文句は
言えないのだ…

「…かなり強気な馬？だな…しかし、お前にほとんどの食料を食わ
れたんだ…で、俺はお前に勝ったんだ…」

…くっ…殺すのなら早く殺せ！

俺が首で早くする様に背に視線を向けた。

「渋々といった雰囲気だが…これからは俺がお前の主だ。…それと
…名前を決めないとな…」

この人間は、俺に時々見る人間と一緒に仲間と同じと言い、名前と
言う物を考え始めているのか一人で唸り始めた。

「これからのお前の人生（馬生）は俺の物だ。…よろしくな、白鳳^{はくほう}」

小さき人間は俺の背を撫で、俺に名前を名付けた。

…良いだろう、小さき人間…お前は俺に勝ったのだから、俺はお前
の下についてやる。

俺がまだ生きられると分かり喜べば、先程の戦いの疲れが一気に出てきた。

疲れた…それに、この人間に撫でられると気持ち良く、暖かいな…

「さて…白鳳…お前に飯を食われたからな…少し休んだら、お前には働いて貰うからな」

その人間はそう言い、俺を枕にして寝始めた。

…俺も寝るか…

そして、俺と主は目を覚まし、俺は群れを率いていた時に見た沢山の人間が居る場所に向かった。

s i d o u t

「ひひーん！」

「によわ!？」

白鳳の嘶きで飛び起きれば、目の前には規模は小さいが村があった。距離はかなりあるが、食料がかなり心許無い煉龍にとっては規模など関係無かった。

「これで漸く食料が買える。」

これで食料で悩む事が無くなると浮かれていた煉龍は村に漂う雰囲気

気には気付かずに、村にへと入っていった。…まさか、旅の初日にいきなり、トラブルに巻き込まれるとは知らずに

「…何で人の気配が無いんだ？」

白凰に乗って村に入れば、村に居るはずなのに人の気配が無い事に漸く気づいた。

「…まさか、廃村？」

村に人の気配が無い事でありえる可能性を思わず呟けば、がっくりと肩を落とし、ため息を吐き出した。

「おい！その者！」

声をかけられ、後ろを振り向けば、体中に大小様々な傷がある銀糸を三つ編みで一本に纏めている目付きの鋭い女性、楽進がいた。

…あれ？これってあれですか？三羽鳥のデビュー戦？

煉龍が楽進を見て考えて入れば、楽進は何も答えない煉龍を更に警戒してか、構え出した。

「私はお前が何者だと聞いている。…賊ならば…討つ。」

「ちょっと待って、俺はただの旅の者で、食料が尽きたからこの村に来んだ。」

「白々しい…」

そう呟くと、臨戦態勢なのか楽進が気を纏い始めたれば、楽進の背後から虎柄のブラをした宇宙人みたいな髪留めをしている紫髪の女

性：李典と三津つ編みをサイドポニーにしたそばかすがある茶髪のおしゃれな服装の女性：于禁が慌てた様子で楽進に近づいてきた。

「風、ちよい待ち！」

「風ちゃん、その人は賊じゃないのお〜」

「沙和、真桜：だが、村の者はほとんど避難しているのに、この者は村に居るのだぞ。」

「風ちゃん、この人は何処にも黄色い布を巻いてないから違つのお〜」

于禁からの言葉を聞き、煉龍は自分が賊では無いと証明する為に白鳳から下りた。

「…すまない、だが…武器を持っているのであれば、手伝って欲しい。」

「良いですよ。…それでさっき、賊だとかって行ってましたけど、どうかしたんですか？」

煉龍がそう問い掛ければ、楽進達は緊張した表情になった。

「実は今日、黄巾党って賊がこの村に来るの…」

「うちらはたまたまこの村に来て、義勇軍に参加したんや」

「私達と義勇軍よりも数が多く、早馬を出して陳留の勅使に援軍を求めたのだが…それまで、何とか持ち堪えないといけない…」

…成程ね…様は今現在は、黄巾の乱が本格化する前か…

楽進達からの言葉を聞き、時代の進み具合を確認をすれば、煉龍はある事に気づいた。

村に人は居ない

食料が手に入らない

俺、いつかは飢え死に…

楽進とのフラグを建てる為と食料を手に入れる為に俺も参加するか。

「解った。俺も参加する…だけど、これだけは譲れないがある。」

「なんや？譲れないのって？」

「腹が減ったからご飯を先に…」

煉龍が義勇軍に参加の意思を示し、条件を言えば、白凰は呆れた様にため息を吐き出して、楽進達は呆気に取られた様な表情を浮かべれば、煉龍の腹の虫が抗議をするかの様に盛大な音を鳴らした。

村だ！戦だ！義勇軍だ！…ちょっと待てー！俺は腹が減っているんだ！飯をく

次回、大規模戦闘2回目…次はもっと上手くかける様に頑張ります。

食後の運動って大事だよね。だけど、限度ってのはあるよね。(前書き)

更新が遅くなってすみません。

前回よりは上手く書けたかな？って思っています。

食後の運動って大事だよ。だけど、限度ってのはあるよね。

ガツガツガツ！

どうも、煉龍です。腹が減ってはなんとやらで、村を守る義勇軍の方と一緒に食事をしており、俺は楽進・于禁・李典の3人と一緒に食事をしてます。

「しっかし、よお食べるなあ〜自分」

「腹が減っているますし、腹が減っては戦は出来ぬって言うじゃないですか」

今現在、俺はチャーハンを食べています。∴避難していた料理屋の店主を楽進達が無理を言って連れてきて貰いました。

「さつて、御馳走様でした。あつ、お勘定はいくらですか？」

「勘定は良いよ。ただ、うちの飯を食って腹一杯食べたから勝てたって宣伝してくれれば」

「色々な所で宣伝するよ。」

財布を取り出して会計をすまそうとするも、女将の粹なはからいで、タダになれば、女将に宣伝する事を確約した。

「ところで、お兄さんの名前は何なの？」

「あつ、自己紹介が遅れました。姓は藍らん・名は霸は、字は鳳ふうで、貴方達は？」

「うちは姓が李、名は典、字は曼成や」

「さわの姓は于、名は禁、字は文則なの」

李典・于禁と自己紹介を済ませれば、楽進の声が聞こえずに、楽進に嫌われたのかと思ひ視線を向ければ…
顔を僅かに赤らめて煉龍を眺めていた。

「風、ぼおっつとしてどないしたん？」

「なっ！私はぼおっつとなどしていない！」

「おや、いきなり慌てるなんて怪しいで」

「真桜ちゃん、これはあれなの〜」

「ああ〜、アレやな」

ニヤニヤとして煉龍と楽進を二人は交互に見れば、楽進は顔を隠すように麻婆豆腐を慌てて食べ始めた。

side 楽進

最初は賊かと思った…誰も居ない村に武器を携え、馬に跨り辺りを伺っていたのだから。

「おい！その者！」

声を掛け、彼が振り向き視線が合った時、私の中で何かを通り抜けた。…いや、射抜かれたのだ…彼の鋭い視線に…だが、賊かもしれない…

「私はお前が何者だと聞いている。…賊ならば…討つ。」

「ちょっと待って、俺はただの旅の者で、食料が尽きたからこの村に来んだ。」

「白々しい…」

…言葉では私は強気で保っていたが、内心…彼が賊でない事を祈り、

自分が彼に向けた言ってしまった言葉に少し落ち込んでしまった。
…こんな事を言ってしまう自分に。

構え、内心は半ばヤケクソ気味に気を纏えば、背後から一緒に来た真桜と沙和が追いついてきた。…凧にとっては更に落ち込む情報と一緒に。

「凧、ちよい待ち！」

「凧ちゃん、その人は賊じゃないのお〜」

…えっ、私は賊でないこの人に…だが、賊の可能性も…

「沙和、真桜：だが、村の者はほとんど避難しているのに、この者は村に居るのだぞ。」

「凧ちゃん、この人は何処にも黄色い布を巻いてないから違つのお〜」

沙和の言葉を聞き、自分が黄巾の賊で無い事を証明するために彼が馬から飛び降り…何処にも黄巾が巻かれていない事を見れば、私は内心…別の事で頭が真っ白になった。

…ああ…彼に嫌われた…第1印象も最悪だし、私の体って真桜みたいに胸も大きくないし、沙和みたいにオシャレじゃないし、鍛錬や戦いで傷だらけだし…

「…すまない、だが…武器を持っているのであれば、手伝って欲しい。」

「良いですよ。…それでさっき、賊だとかって行ってましたけど、どうかしたんですか？」

だが、せめて一緒に戦い、彼の勇姿を姿に治めて思い出しよう。

S i d o u t

「えっと、もう一回いうね。俺は藍らん、名は覇は、字は凰ほう」

「私は姓は楽、名は進、字は文謙」

「よろしく、楽進…で、これから、どうするんだ？」

麻婆豆腐を食べ終えた楽進と自己紹介をし合い、三羽鳥と自己紹介を終えれば、これからの事を問掛ければ、李典達が真剣な目付きになった。

「村の四方に防護柵を作つて、村に賊が入るのを防いで、柵越しに陳留からの援軍を待つしか方法は無いの…」

「で、材料が足らへんくて、北側の防護柵が少なく、作業があまり進んでおらん…」

「敵は800…そして、こちらの数は200…この戦いに勝つには、どうしても陳留の援軍を待たねば」

…成程ね…多分、賊にも北の防壁が薄いつてのはバレてると考えて…それに、楽進に良い格好見せたいからな…

「なら、俺が北の防護を受け持つ…幸い、俺は馬を持っているし」

「…なら、頼むで…」

「あつ、それと用意して欲しいのがあるんだけど、良いかな？」

「何なの〜？」

「はい、鎖と防護柵を作っている時に出来た木端と縄なんて使つて

「どうするきなのか？」

俺が欲しがっていた。鎖と俺の足に合う木端と縄を于禁から受け取り、楽しそうに笑顔を浮かべれば、殺気を感じ背後を振り向いたのだが、誰も居なかった。

「どうしたのか？」

「…いや、少し数気を感じたんですけど、気のせいだったみたい。」

そう言い、煉龍は于禁と別れて自分の持ち場にへと白凰と一緒に向かった。

「さつて、まずは鎖の片方に輪っかを作って…おい白凰、輪っかを銜えてくれ。」

白凰に輪っかの銜えさせて、もう片方の輪っかを腰に鎖を結んで…あとは、両足に木端を結んで取り付けて…

「さつて…準備は出来た。あとは援軍が来るまでに持ちこたえるか」

早く終わらせて、楽進に良いところを見せて、フラグを建てようつと

「ちょうど良く賊も着たみたいだし…白凰…あの人の群れの中を自由に乗回れ」

「ひひひひん！」

煉龍の声を聞き、白凰は勢い良く黄巾の集団にへと駆け出した。

「藍覇鳳！フリーダム行きます！」

軽く前世で一番好きだったガンダ○の名前を叫び、犬ぞりの様に引かれれば煉龍も黄巾の集団にへと引き摺られて駆けて行った。

「おらっあー！」

賊の集団と白鳳が数人の人間を轢き殺して集団の中を駆けずり回れば、煉龍も水平に天龍戟を振り払い、龍爪で数人の命を刈り取り、龍尾で数人の頭を砕いていった。賊の何人かは煉龍に向け、槍で突き、剣で切りかかるも、高速で引きずられている連龍を捉える事は出来なかった。

「落ち着けー！相手は一人だ！数ではこつちが勝ってるんだ！」

おっ、あの落ち着いて回りに指示を与えているのが指揮官か？…ああいう、指揮官は早めに対処しないと…

「白鳳！周りに指示をしている人間が居たらその人間の所に向かってくれ」

白鳳に指示を出し、引き摺られながら黄巾の賊を少しずつだが、天龍戟を振り回し、賊を切り伏せ、叩き伏せて行きながら指揮官らしき男に白鳳を向かわせた。

「単騎だから来ると思った！槍隊！前へ！」

ぬお！あの指揮官…出来る！普通の馬に乗っていたら確かにやられていただろう…だが…白鳳はただの馬じゃなく…キリン（G級）なんだよ。

「跳べ！白凰！」

「ひひくん！」

「なっ！？」

「跳んだ！？」

賊が展開した槍袈を白凰が跳んで避け、煉龍も鎖で引っ張られて跳び

「貰ったあー！ー！」

天龍戟の龍爪で賊の首をすれ違い間際にはねとばしせば、指揮官を失った事で周りの賊は慌て始めた。

「白凰！逃げ出した奴を確実に踏み潰して、逃すな！」

此处で逃したら…また、集まって何処かの村が襲われる

腰に回していた鎖を体から外し、白凰に命じれば煉龍は賊の集団のまっただだなかに着地した。

「野郎ども！化け物と馬と離れたぞ！」

「それにあいつの武器は馬鹿でかいから振り切りのに時間がかかるぞ！やっちまえー！」

白凰と別れ、一人になった事で、散り散りに賊が集まってきた。

四方八方から賊が攻撃してくるのを感じる…だがな、一つだけ言うてやるよ。

「一人だからって、甘く見るな！龍刃乱舞！」

勢い良く振り抜き、前に立つ賊を斬り伏せ、勢いを殺さず後ろにも振り、後ろの敵も斬り、天龍戟を頭上でバトンの様に回転させ、龍爪・龍角で近づく敵を斬り、龍尾で殴り、時折、天龍戟自体を半回転させ、龍牙で敵を武器事叩き斬れば、寄ってきた賊に平等に死を与えていった。

「ひっ！？こいつ…強いぞ！」

「逃げるぞ！こんなやつに勝てるか！」

煉龍にかなわないと見ると、賊は武器を放り出して逃げ始めるも

「逃がさない！」

煉龍は天龍戟を振り回すのを止め、龍尾で逃げ出す賊の頭を正確に打ち抜き

「ひひひん！」

ぐしゃ！

白鳳が逃げ出している賊を踏みつけていた。

「…さて、どういう理由で賊になったかは知らないが…人の命を奪うって事は奪われる覚悟があるんだらう？」

「ひっ、く…来るなあー！」

「さあ、龍の爪に斬り殺され、龍の角に貫かれ、龍の牙で断たれ、龍の尾で叩き伏せられるかは…天のみぞ…知る」

叫び声を上げて逃げ出す賊に向かい、煉龍は白鳳は慈悲の欠片も無

く逃げ出した賊に追撃をし始めた。

ふう…こっちの賊はもう居ないな…

「白凰：楽進の居る方向に行くぞ。楽進に良いところを見せて…援護して少しでも楽をしてもらわないとな…それに、女の子だから、肌に傷跡が残ったら落ち込むかもしれないしな」

そう言い、連龍は天龍戟を使って白凰に乗れば、自分が守っていた場から離れて、楽進の守っている方向に向けて駆け抜けていった。…残っているのは、血で染まった赤黒い大地と巨大な何かによって踏み潰された死体と斬られた死体と何かに殴打されて体の一部が凹んでいる死体だけだった。

運良く煉龍と白凰の追撃から逃げられた賊は両手で数える程しかおらず、彼らは二度と賊にならず、武器さえも持つことは無かった。

彼らは後にこう語った。

『白い麒麟を従えた人喰いの魔龍と対峙するかもしれない…あんな怖い思いする位なら、武器なんて持たずに逃げる』

藍霸鳳：人喰いの魔龍という二つ名の誕生の瞬間だった。

食後の運動って大事だよね。だけど、限度ってのはあるよね。(後書き)

どうも、暴走マッドです。

次は楽進と共闘出来たら良いな〜って思ってます。

秋蘭達とは会わないか?ってツッコミはあれです。楽進との後で、李典・于禁の援護で出す予定です。

こんな作品ですが、感想とお気に入りをしていただくと嬉しいです。

天魔龍の目覚め（前書き）

純情凧ちゃんと無自覚煉龍くん

そして、戦闘はそれなりに細かく描写出来たと思っています。

天魔龍の目覚め

side 楽進

「はぁぁー！！」

内功で体を強化して、賊を一人一人確実に仕留めていき、地には既に気で強化された拳や脚で仕留めた賊が数十人、地に伏せて天を仰いでいた。

くっ…別れたとはいえ…数が多い！

楽進が一人一人確実に倒していくも、数を武器に賊が義勇軍の勇士を一人一人確実に凶刃で命を奪っていけば、その負担は確実に少しずつ、楽進の体力を奪っていった。

「はぁ…はぁ…」

くっ…数が違い過ぎる！…だが、此処で逃げ出す訳には！

相対する賊を睨みつけるも、村を守る義勇軍で立っているのは楽進だけとなっていた。対する賊は50人程残っていた。

「残っているのはもう、お前だけだ。」

「あの村を襲う前にまずはお前だ。」

「体中傷だらけだが、よく見れば可愛いじゃねえか」

くっ…この様な奴等にこんな視線で見られるのはなんとも不快極まりない…

下卑たる笑みを浮かべて少しづつ楽進との距離を詰めていけば、楽進は残り少ない気を纏い、李典・于禁が少しになる様に一人でも道連れにする覚悟を決めた。

「あの村の女を犯す前にまずはお前から犯すか」

くっ…あんな獣に犯される位なら一人でも…多く道連れにしてやる！…そして、死ぬ前に…藍鳳と真名を交換したかった。

「さて…お前の体で楽しませて貰うぜ！」

「…おい…お前等…命はいらねえ様だな…」

賊の下卑たる笑い声が響く辺りに、全てを灰燼に帰す藍の炎を彷彿とされる静かな怒りを含んだ、怒気の籠った底冷えのする声が響いた。

「ああ？」

「誰だ手前？」

「今更、一人で来てもどうにもならねえよ。野郎共！あの女を犯す前にこの男を始末しまえ！」

あっ…あれは…

賊は自分達の数と言う武器に新たに現れた男を見て余裕の笑みを、楽進はその男を見ては驚きと自分のピンチに現れた事に嬉しく、安堵の表情を浮かべた。

そこには白い巨大な馬に跨った龍の装飾が施されている風変わりな方天戟を肩に担いでいる…藍覇が賊に向けて冷たい視線を向けていた。

side out

俺が楽進の元に付いた時は、義勇軍は既に楽進だけとなっていた。

「あの村の女を犯す前にまずはお前から犯すか」

「さあて…お前の体で楽しませて貰うぜ！」

…こいつらに慈悲を掛ける必要は無いな…そして、知らないとはいえ、俺、楽進って前世の頃、とっても好きな恋姫のキャラなんだよね。…楽進が居るから、恋姫夢思の魏を買おうかと迷う位に…結局は好きなヒロインが多い蜀を買ったけどさ…だってさ…星や恋や焰耶も好きなんだよ。文句あるかー！

…っと、意識を飛ばし過ぎてたな…ともかく…好きなヒロインに手をかけようとするこの賊には一切の情をかける必要は無いな

「…おい…お前等…命はいらねえ様だな…」

煉龍の声に気づき、賊達が煉龍を威圧する様に睨みつけければ、相手が一人である事が解り余裕の笑みを浮かべた。

「ああ？」

「誰だ手前？」

「今更、一人で来てもどうにもならねえよ。野郎共！あの女を犯す前にこの男を始末しまえ！」

「白鳳：お前は楽進の所に行つて待つてろ。」

白鳳から飛び降り、肩に天龍戟を担げば、煉龍は空いている手で賊に向けて自分に掛かつて来いと挑発をした。

「あの野郎！舐めやがって！」

「ぶち殺せー！」

煉龍の挑発を受け、賊は一人残らず煉龍に向け、武器を振りかぶつて突撃を始めた。

side 楽進

助かった…これで村が守れる…だが、彼は村の北側を守っていたはずじゃあ…

彼が担当していた方向を思い出せば、まるで信じられないものを見る様な目付きで煉龍に視線を向けた。

まさか…村人よりも私を取つたと言うのか？…しかし、私は何処かの主君に使い、この乱れた世を…しかし、もし彼に迫られたら…真名の交換だつてまだしていないのに…だが、此処にいるって事は少なくとも、最初の印象は関係なく…

賊は煉龍と戦っているため、彼が此処にいる理由を考えれば、恋する乙女にとっては少し都合が良い想像をし、一人で顔を赤らめてはブツブツと何かを呟いていた。

がぶっ

「うひゃ!?!」

「ぶるるっ」

だが、白凰に頭を噛まれ現実に戻れば、白凰はすぐに楽進の頭を開放し、その横に堂々とたった。

「確か…藍鳳の馬だったな、どうかしたのか?」

白凰に訪ねながら撫でようと手を伸ばせば、白凰は大人しく撫でられ、ながらも楽進を賊から守る様に一步前に出た。

「お前…私を守りに来てくれたのか?」

楽進がそう尋ねると、白凰は言葉が通じるのか、一度首を縦に振ったのを見れば、驚いた表情を浮かべた。

「…まさか、言葉が解るのか!」

楽進の問いかけに白凰は首を縦に振り、視線を楽進から賊と相対する煉龍へと向けた。

「なっ!?!」

そこには龍が居た…此処には一人しか居ない味方には勝利を約束する天龍、敵には死と言う名の敗北を約束する人喰いの魔龍が居た。龍の角で一人が絶命し、龍の爪では数人一気に切り裂かれ、龍の牙では武器を盾にしようとも、縦で振るわれれば両断され、薙がれたら数人が噛み砕かれ、龍の尾を振るわれれば、尾に当たれば骨が砕かれていった。

side out

挑発された賊が我先にと煉龍に向かっていった。

「うおおー！」

「ぶつ殺せえー！」

「死ねえー！」

武器を高く掲げて煉龍に賊が向かって行けば、煉龍は天龍戟に付いている鎖を解き

「はあ！」

勢い良く天龍戟を震えば、最初に来た賊数名龍爪で切り裂き

「貰ったあー！」

「死ねえー！」

ガン！ボキ！

次いで来た賊には勢いの乗った龍尾で撲殺して行った。

「さあ…死にたい奴はかかってこい…もっとも…かかってこなくても俺から行く」

楽進を下卑な笑みで舐めわまして、犯そうとしたんだ。生かす訳にはいかないな。

煉龍も賊に向いながら龍角を突き出し、賊の一人を突き殺せば、槍

を持った賊達には反撃とばかりに突きを繰り出され

「そんなノロマな槍に刺さるか！」

大きくサイドステップで槍を買わせば、天龍戟を大きく振りかぶり

「馬鹿め！防いでお前を針鼠みたいに、槍まみれにしてやるよ！」

「防げるものならな！」

天龍戟を半回転させ、龍牙を賊に向け

「はあ！」

武器を盾にする賊に向け、龍牙を薙げば武器事賊をまっふたつにした。

「なっ！恐れるな！相手をたった一人だ！」

「恐るな！たった一人だ！困め！」

弱気で煉龍の強さに気づいた数名は煉龍と相對すれば死ぬと理解し、他の賊にバレない様に村とは逆方向に逃げれば、残った賊は煉龍を囲み、剣で斬ろうと、槍で突き刺そうとし

「死ねえ！」

「くたばれえー！」

「…困んだ位で俺を殺せる位なら、俺はもうとっくに死んでんだよ！」

武器を勢い良く龍爪で薙ぎ、前面にいる相手を切り裂き龍尾で撲殺し、勢いを殺さずに後ろの敵も切り裂き撲殺すれば、1回転し頭上

で天龍戟の角度を前後の角度を交互に傾けて回転させ、自分に向けてくる賊を迎撃する様に容赦なく平等に死を与えていった。

「ひ…怯むな！懐に入れー！」

「こ…こんちくしょうー！」

数が減り5人程になるも、賊は果敢に挑み懐に入ろうと突っ込んで行けば、一人は龍角で斬られ、一人は龍尾で頭を凹まされ、二人は龍爪で切り裂かれ

「貰ったー！」

最後の一人が龍の爪も龍の尾をかいくぐり斬り殺そうと振りかぶるも

「殺してから言いな」

ボゴツ！

「ぎゃあー！」

棒部分で脇腹を殴られ、その場に蹲れば賊は化け物を見る様な目付きを煉龍に向け

「…殺さないで」

「お前は命乞いをする奴の願いを聞き入れたのか？お前は何故、武器を持ち村を襲おうとした？お前は何故、武器を持った？」

「せ…生活が苦し…頼む…殺さないで」

「覚悟も無く武器を持つな…武器を持ったのであれば…殺される覚悟もしろ！」

煉龍は賊に冷たい視線を向け、武器を振りかぶり

ドッ！

容赦も慈悲もなく武器で賊の首を撥ねれば、楽進の元へ向かった。

side 楽進

あつ…圧倒的だ…幾ら、数が減ったとはいえ…

最後の一人の賊を殺し終えた煉龍がこちらに来るのを見れば、自分が彼に命を救われた事を思い出せば、自分からも煉龍に向かった。

「助けてくれて感謝する。」

「良いよ。自分が担当していた部分を終えて…嫌な予感がしただけだから」

…今何と言ったんだ？

「今、何と…」

「自分の担当している部分は終わったと」

煉龍からの言葉を聞き、驚いた表情を浮かべ信じられない物を見る様な目付きで煉龍を見た。

「な、なら…何で私の元へ」

「楽進が気になってるから」

煉龍の言葉を聞き、顔を一気に赤らめれば、人差し指同士をくっ付けてもじもじとさせた。

「そ…その…私は、この乱れた世を…」

「そうなんだ。俺は今まで家族としか過ごしてなかったから…この世界を見たかった。」

「そ…そうか…」

そこで会話が途切れれば、白凰は楽進から離れて、煉龍の元に行った。

「見事な白馬だな」

「ああ、最初みた時はあまりの大きさにびっくりしたぞ。」

楽進が白凰の事を褒めれば嬉しそうに煉龍が笑い、白凰も自分の事を褒められていると解っているのか嬉しそうに耳を動かした。

少し良い雰囲気だ…これなら、最初の失敗を取り返せるかも…

「…私の事は凧で良い。」

「真名で呼んで良いのか？」

「命を救われたからな」

「なら、俺の事も真名で呼んでくれないか？」

「良いのか？」

「ああ、俺の真名は煉龍だ。」

「解った…しかし、命を救われた私が真名をあずけるのは解るが…」

それに私の印象は最悪なはず…何で彼は私に真名を預けたのだ？

凧が煉龍と真名を交換出来た事に少し疑問に思い、質問をすれば煉龍は凧が何を言いたいのかを察し

「ああ、凧は俺が此処に来るまで守っていたから一応戦友だし…凧が好きだからね。」

ボン！

わ…私の事が好き！？って、事は…あの想像が！…いや、私は主君に仕え、この世を！…しかし、二人で同じ主君に仕え、夫婦でこの世を正すのも！…あうゝ

ドザッ！

「ちよつと、凧！大丈夫？！」

凧が顔を真っ赤にして倒れるのを煉龍が見れば、慌てて自分が凧を一言で倒した事に気付かず、凧の両肩を持ってガクガクと揺らした。

天魔龍の目覚め（後書き）

まずは一人目攻略です。

…感想けると嬉しいです。

こんな展開が合って欲しいと言う要望があれば感想+で書いてください。

百合霸王との出会い…いや、この時はまだ、百合勅史か…（前書き）

…春蘭好きはバックです。…そして、色々とはっしょってするかも
しれませんが…

百合霸王との出会い…いや、この時はまだ、百合勅史が…

どうも、煉龍です。結局あの後、凧が起きなかつたので横抱きにして、天龍戟を白凰に持つてもらって村に戻っています。

…あの青髪の姉妹みたいな二人は

村に戻ると、陳留の勅史の先遣隊である。夏侯淵と典章が来ていた。

「…おい、その者、2、3聞きたい事がある。」

「はい、何でしょうか？…その前に、貴方は誰でしょうか？」

「申し遅れた、私は陳留の勅史曹孟徳の将、夏侯淵…で、こっちが」

「私は典章って言います。」

「陳留からの援軍ですね。お待ちしておりました。」

凧を横抱きにしながらで、無礼だけど…しょうがないか…

「俺は藍覇…旅の者で、この義勇軍に参加しました。」

「あの…その人は大丈夫なんですか？」

「はい、大丈夫ですよ。」

言えない…真名を交換で、気絶したなんて…凧の事を心配する典章には少し悪い気がするが…こればかりは、凧の名誉の為に言えないな。

「いえ…きつと、初陣だから気絶したんでしょう…」

「そうか」

凧を抱えたまま、夏侯淵達と問答をしていたら、東と西側から、義勇軍の勇士が慌てた様子で走ってきた。

「むっ、どうしたんだ？」

「陳留の援軍ですか？！早く来てください！西側の防衛がそろそろ破られそうなんです。今、李典殿が奮闘していますが」

「東側も！今は、于禁殿のおかげで何とか」

勇士からの悪い情報に少し空気が重くなれば、夏侯淵が顎に手を当て考え

「…本軍が来るにはあと少し時間が必要だ。…それまで、先遣隊である我らで時間を稼ぐ…私は西を、典韋は東側を頼む。」

「はい、秋蘭様！」

「あつ、俺も手伝います。」

「…助かる。では、私と一緒に西側を頼む。」

凧を伝令に来た勇士にあずければ、煉龍は白凰から天龍戟を取り、夏侯淵と一緒に向かった。

side 李典

くっ、あかん…

李典は周りを見ては、自分の劣勢に焦りを感じていた。賊の勢いが思ってた以上に強かった事に。

「ひゃっはー！」

「残りは少ないぞ！」

此処に煉龍が居たら、北〇の雑魚敵だな…と呟きそんな事をモヒカ
ンに肩パットを入れた黄巾の賊は少なくなりつつ義勇軍を追い詰め
ていった。

「…くっ、こっちから手を出さずに、自分の命を守るんや！あと少
し…！あと少して援軍が来るんや…！」

まるで自分に言い聞かせる様に周りに声をかけ、少しでも時間を稼
げば、ついに数少ない味方も、ついには片手で数える位にまで減っ
てしまった。

「ひゃっはー！女は犯せ！食料・子供は奪え！男は殺せー！」

「くっ、そんな事はさせへん！」

「ああ？生意気な女だな」

螺旋槍を構えて、眼前の二人の賊を睨みつければ、賊はそんな睨み
を鼻で笑い

「ともかく、こんな胸がデカイ女なんて滅多に居ないんだ。」

「そうだな…殺す前に犯しちまえー！」

「凧…沙和…後は頼んだで」

一人でも道連れにしようと、覚悟を決め螺旋槍を構えれば

カカツ！

ボゴツ！

「諦めるのはまだ、早いぞ！李典！！」

「よく少ない手勢で持ちこたえた…後は我々が賊の討伐を受け持つ」

矢で賊の両目を射抜いて、残心の構えを取る夏侯淵と天龍戟の龍尾で賊を撲殺した煉龍が居た。

「くっ、援軍か！」

「この二人を殺して撤退だ！」

賊達の目にはまだ少し距離があるが、陳留の軍隊が居た。

「…さて、援護して頂けると、楽なんですが」

「愚問だな…私がない訳無いだろう…」

天龍戟を構え、一気に賊に近づけば、牽制しながらも、夏侯淵は賊を一人一人射殺していった。

「突っ込んでくる相手は一人だ！」

「簡単に殺される程…俺は弱くは無い！」

斬りかかってくる賊に向けて、龍牙を薙ぎ払い龍尾で殴り付ければ、煉龍は賊に向かった。

「やっちまえー！」

「ひゃっはー！」

「…北〇の雑魚敵がー！」

叫びと共に夏侯淵の援護を受けながら、天龍戟を振るえば、徐々に

だが賊の数を減らしていった。

side 夏侯淵

…この男、出来る。

矢を射ながら夏侯淵は煉龍の実力に関心していた。

…この男…後ろに眼があるかの様に何処に矢が来るかを予想し、矢の軌道を避けている。

煉龍が前衛で、容赦の無い暴れっぷりで、自分の所に打ち漏らしが来ない事で、夏侯淵は安心して矢を射る事に集中すれば、賊の数は徐々に減っていった。

「あの男…華琳様の元へ来れば…天下への道が近づく」

…ただの賊の討伐かと思えば、良い拾い者をしたかもしれない…

賊の討伐を完全に終えた後の事を考えながら、夏侯淵は思わず口元を僅かに釣り上げて誰にも解らぬ様に微笑んだ。

side out

さって、こつちも終わった。

西側の賊を倒し終え、煉龍は肩を上下させて息を整えれば、肩に天龍戟を担げば、軽く息を吐き出した。

「見事な武だ。」

「…まあ、十年間…ほぼ毎日死ぬかと感じる鍛錬を受けたので」

「…それは凄い…」

「…言葉では簡単に済みますけど…所で、東側は大丈夫なんですか？」

「ああ…流琉が行ったからな」

夏侯淵がそう言うと、背後振り返って村を見れば、口の端を釣り上げて、村のはるか先を見てある一点を見つめた。

「それに…援軍も来たようだしな」

その視線の先には堂々と揺れる曹の牙門旗が掲げられていた。

秋蘭達が村に戻れば、村にはかなりの数の村人が戻ってきており、村長らしき人が、サイドツイン細ドリルヘアーの少女に何度も頭を下げていた。

「華琳様、賊の西側の賊の討伐は完了しました。」

「ご苦労、秋蘭…なら、残りの北と南は？」

「先遣隊が村に付いた時には既に討ち取られていました。」

「…なら、こここの義勇軍が優秀だったのね…秋蘭、その義勇軍の者達の所に案内しなさい。」

「はっ！」

ああ…疲れた。陳留の軍が来た事だし、保存食を買って…あつ…でも、もう少し凧と仲良くなりたいたいけど…何か大事な事を忘れてい

たな…

「おい、藍覇…華琳様がお呼びだ。」

…あつ、思い出した。三羽鳥のデビュー戦のすぐ後ってスカウトだったんだ。

「…えつと、拒否は？」

「出来る訳無いだろう」

夏侯淵は深くため息を吐き出して、逃げ出そうと背に向け煉龍の襟首を掴めば、曹操の元にへと煉龍を引きずって行けば、既に、凧・李典・于禁が、サイドツイン細ドリルヘアー…曹操の居る部屋に集まっていた。

「貴方が藍覇ね…話は秋蘭、楽進達から聞いたわ。」

「そうですか…で、俺に何の用ですか？」

「貴方、私の物にならない？」

「お断りします。」

即答で曹操の誘いをあっさりと曹操の背後から勢い良く何か飛び出し

「貴様…！華琳様の誘いを断るとは何事だ！」

どごあん！

…お…おい、誘いを断ったら抹殺って…

間一髪、飛び出してきた物の攻撃を避ければ、地面に突き刺さった

物に視線を向けた。

…この大剣…そして、こんな事をするのは…

「…出たな、脳筋…」

「誰が脳筋だ！貴様！華琳様の誘いを断るとはどういうことだ！」

夏侯惇が地面に突き刺さった大剣を引き抜けば、剣先を煉龍に向けて部屋だと言うのに叫び睨みつけた。

「いきなり斬り殺す相手に礼儀は不要だ。それに、自分の主の立場も全く考えず、この村を賊から助けた人間を斬る人間を仕えさせるなんて、主である曹操の器もしれているな」

「貴様……！」

「春蘭！黙り剣を引きなさい！」

「しかし、華琳様」

遠慮無く言う煉龍の言葉に、夏侯惇が憤慨し大剣を振りかぶるも、華琳の怒声で、直ぐに情けない声を上げた。

「貴方はこれ以上、私に恥をかかせたいのかしら？春蘭」

「うっ…解りました。」

夏侯惇が大剣を下ろすのを見れば、呆れた様にため息を吐き出し、煉龍に視線を向けた。

「部下が失礼したわね。」

「次は無い様にしてください…じゃないと、本当に評判に傷が付きますよ。」

「ええ、気を付けるわ…春蘭…暫く、貴方は伽の相手から外すわ」
「しょんなく！華琳さまあ〜！」

ははっwざまあw

曹操からのお仕置きを聞けば、今にも泣き出しそうな表情で曹操にすがりつく夏侯惇を見れば、楽しそうに煉龍が見れば、場を取り直す様に夏侯淵がわざとらしく咳きをした。

「本題に入るわね。少ない義勇軍でこの村を守ってくれて…貴方達は何処にも仕えてないんなら、私の物にならない？」

曹操からのスカウトの言葉を聞き、李典達は嬉しそうな表情をし、領けば煉龍は少し考える様に顎に手を当て

「確かに…普通は君主からその様な言葉を聞くのは中々ありませんね。」

「なら、全員…私のモノになるのね？」

「だが、断る…！」

「貴様…！」

一度、言ってみたかった事を声高々に叫べば、少し前まで泣いていた夏侯惇がまた、激怒し大剣を振り下ろすも、今度は予測していたのか、煉龍はあっさりと避けた。

「貴様…！避けるな！」

「お前の頭はついさっきの出来事を忘れる位に出来が悪いのか？仮にも村を救って、曹操様から士官の誘いがある人間を斬り殺そうとしている意味が解るのか？いや、解っていたらこんなバカなマネはしないだろう。お前が斬りかかるって事は、お前は自分の主の決定

に逆らっているのだぞ。それに、もし当たっていたらこの村から曹操の部下は村を救った人間を斬り殺したと曹操の評判も悪くなるのも、まったく理解していないようだな。それに、お前は少し前に今と同じことをして、罰を言い渡されたのを忘れて、また斬りかかってくるとは…学習能力が無いのか？犬や猫でも学習はするというのに…はあ…体ばかり鍛えているから、脳の考えるって事を忘れて脳みそも筋肉みたくなっているんだよ。斬りかかってくるのは構わないが、もう少し自分が起こした行動でどの様な結果になるか、考えて行動するべきじゃないのか？…いや、失礼、その様な行動が出来ないから、先程罰をくだされたのだったな。」

一息で、これでもかと罵倒する言葉を聞き、青筋を浮かべる夏侯惇を見て、周りは呆然とし、曹操もため息を聞けば申し訳なさそうな表情を浮かべた。

「…春蘭…貴方はこの場から立ち去りなさい。」

「し、しかし…」

「立ち去りなさい！春蘭！」

「ほら、姉者…」

渋々と言った表情で夏侯惇が部屋から出ていけば、深くため息を吐き出して、覇気を吹き出しながら曹操は煉龍に鋭い視線を向けた。

「何で私のものにならないか…教えて貰えるかしら？」

「俺が旅をしているのは、この大陸を見て回りたいからです。もし、曹操様に仕官したら、様々な所を見て回れないからです。」

煉龍から仕官出来ない理由を曹操はため息を吐き出した。

「解ったわ…だけど、見終わったら私の物になりなさい。」

「仕えたいと思った君主が居なかったら」

こうして、百合霸王、曹操との出会い、なんとか保留してもらった事が決まれば、煉龍はとっとと逃げる様に、旅の準備をして村から出ていった。

三羽鳥はって？原作通りに仕える事になりました、ただ一人とても落ち込んでいる以外は…

百合霸王との出会い…いや、この時はまだ、百合勅史か…（後書き）

…これで、まずは一人目…次は星達と絡ます予定です。

からかうのは良いが、ちゃんと人を見て選ぶ…じゃないと、大変な事になるぞ
難産でした…

そして、漸く更新しました。
感想ありがとうございます。

からかうのは良いが、ちゃんと人を見て選ばう…じゃないと、大変な事になるぞ

どうも、煉龍君です。今、現在は……ぶっちゃけて迷子です。

「白凰…暇…」

「ぶるるっ」

煉龍の言っている言葉に嘶いて返すも、何を言っているか煉龍は解らずため息を吐いた。

「…例え、白凰が俺の言葉が解っても、俺が白凰の言葉が解らなかつたら意味は無いか」

深くため息を吐けば、白凰も俺の言葉の意味を理解し、ため息を吐き出した。

「おい！お前！ここを通りたかつたら、馬と身ぐるみを置いて行きな！」

「そつだ、命が惜しかったら大人しく言うとおりにすれよ！」

「そつなんだな〜！」

声のする方向を見れば、黄色の布を巻きつけた槍で武装したデブ・チビ・ノッポの三人がいた。

「……さて、白凰、次はどの方向に行こうか…」

「おい…」

「でも、どっち行ったら村があるのか」

「おい！無視するな！」

「出来れば、洛陽とかの方向が解れば…」

「だから、無視するな！」

…はあ、見るからにザコと戦って腹を減らすのは嫌なんだけどな…

「で、何の用？」

「ここを通りたかったら、身ぐるみと馬を置いて行きな！」

自分達の方が数が居るから有利だと思い込んでいるのか、余裕の笑みを浮かべている黄巾トリオは、持っていた槍を煉龍に向けた。

「じゃないと、お前の命を取るぞ。」

…さて、何時までも相手をするのはめんどくさいな…

ため息を吐き出して、武器を肩に担いで白凰から飛び降りれば、めんどくさそうに黄巾トリオに視線を向けた。

「どうやら、俺達に挑むみたいだぜ？」

「3対1で俺達が勝つのに」

「そうなんだな」

さて、早く終わらすか…じゃないと…野宿が待ってる。

「死にやがれー！」

「おらー！」

「そうなんだな」

煉龍に向けて槍を突き出せば、煉龍は眠たそうな目付きで槍を避ければ天龍戟を振りかぶり

「…はあ…眠い」

そう一言呟き、天龍戟の龍牙を薙ぎ

ボキッ！ボキッ！ボキッ！

賊の頭を全て斬り落とせば、深くため息を吐き出した。

「…つたく、最近はよく見るな…」

そうため息を吐き出して、白凰に乗ろうとすれば…

「そこのお前！罪も無い者に手を出すとは！この超子龍が成敗する！」

…えっと、何で…確かに、この世に転生する前に、紙様（笑）を拷問したけどさ、鬼畜なバグ母の子に転生して、死ぬと感じた修行を付けられて、2度も目当ての武将に賊と勘違いされる訳…

声をかけられ、後ろを振り向けば、紅い二又に別れている龍牙を構えた、白い蝶の様な着物を身にまとった青髪の美女：超子龍に睨みつけられ、煉龍は落ち込んだ様にため息を吐き出した。

「…えっと、その前に話を聞いて貰えません？」

「問答無用！」

ちよ！この人も！武将って人の話しを聴かない人種なの！？って、言うよりこの人の突きの速度！速い！

趙雲の正確無比な残像を残す連続突きをいなし、風を切る薙ぎ払い

を避ければ、煉龍は趙雲にはバレない様に舌打ちして嵐の様な趙雲の攻撃を避け、いなし続けた。

「…ちっ…」

だが…静かだが、相手に微かに聞こえる舌打ちが切欠で、今まで防御し、避け続けていた煉龍の動きが変わった。

「はあ！「ちっ」「っ!？」」

趙雲の突きを制する様に僅か先に煉龍から突きが繰り出された。

「な「ちっ!」「らあ?!」」

趙雲が薙ぎ払いを繰り出そうとすれば、煉龍は趙雲の薙ぎ払いよりも、僅かだが先に龍爪を趙雲に向けて薙ぎ払った。

「くっ…」

攻撃を中断して、防御に回ろうとするも、防御すらも中断して後ろに大きく飛び…

ジャラララ

「おっ…中々良い反応だな」

さすが歴史に名を残す猛将…あのまま、俺の龍牙での薙ぎを防御しても、龍尾の追撃の餌食になると感づいて、大きく下がったか。

「…賊にしておくのが、惜しい武だ。」

「生憎、俺は賊ではないぞ。」

「星ちゃん、そのお兄さんの言つとおりですよ。」

「ええ、星…貴方の早とちりです。」

side out

side 星

自分が仕えるに相応しい主君を探している時に、私達はある噂を聞いた。

『陳留の近くにある村に天龍の化身が表れ、村を黄巾の賊から救った。』

噂を聞き、私は天龍の化身と噂されるその人物に興味を持ち、私達はその噂の出どころの村にへと向かった。…だが、途中で、私達は酷く怯える人を見つけ声をかけた。

「…龍…人喰いの魔龍が…」

男はそれだけを言い、また膝を抱えて震えだした。

「…龍の化身…？」

私達は震えるその男を放置し、噂の出処となる村にへと向かった。…だが、その途中で私達は首のない死体を足元に伏せさせた一人の青年と出逢った。

「そこのお前！罪も無い者に手を出すとは！この超子龍が成敗する

！」

私は自分の得物である龍牙を片手に自分に背を向けている青年に声をかけた。

「えつと…話を聞いてもらえませんか？」

この時、私は彼の鋭い視線に穿つかれた…だが、この男は賊で、罪も無い民を手にかけたのだ！すっかりとしろ！超子龍！

「問答無用！」

私は彼とこの様な形で出逢ってしまった運命を呪いながら、突きを何度も繰り出せど、男には掠りもしなかった。

くっ、当たらぬ！

だが、急に男の動きは変わった。

「はあ！「ちっ」「っ！？」

趙雲の突きを制する様に僅か先に煉龍から突きが繰り出された。

「な「ちっ！」「らあ？！」

趙雲が薙ぎ払いを繰り出そうとすれば、煉龍は趙雲の薙ぎ払いよりも、僅かだが先に龍爪を趙雲に向けて薙ぎ払った。

「くっ…」

…まるで、自分の攻撃を先に読まれ、牽制されている感じがする…
だが、それよりも…あの武器は厄介だ。大型の武器に出る隙を限りなく減らしている。

「おっ、中々良い反応だな…」

男と距離を置き、機を伺っていたら、男が関心する様に声をかけて来た。

「…賊にしておくのが、惜しい武だ。」

「生憎、俺は賊ではないぞ。」

「星ちゃん、そのお兄さんの言うとおりですよ」

「ええ、星…貴方の早とちりです。」

……だが、この男との打ち合いは風達の乱入で思わぬ形で幕を下ろすことになった。

side out

side 煉龍

俺と趙雲との死合は別の人間達の乱入により幕が下りた。

「…風に稟…この男が賊でないと言うのは何故だ？」

「このお兄さん、体の何処にも黄色い布を巻いていないんですよ」

「それに星…彼は私達に何か伝えたい事があるみたいです。…賊なら、そんな事をしません。」

眼鏡をかけた知的美人といった風貌の郭嘉と頭に小さな太陽の塔を乗つけた眠たそうな金髪幼女程？が趙雲に、煉龍が賊でない理由を

話した。

「助かりました…俺は姓は、藍・名は覇、字は鳳です。」

「先程は失礼した、姓は趙、名は雲、字は子龍と申す。」

「私は姓は戯、名は志、字は才」

「風の姓は程、名は？、字は仲徳なのです」

互いに自己紹介を済ませれば、煉龍と趙雲は互いに武器を引いた。

「しかし、お主の武は凄いな…さぞかし有名な武人なのだろう」

「いや…ただ、死にたくない一心で強くなっただけですから…」

趙雲に褒められて嬉しいのか、煉龍は目を細めて笑えば、気のせい
か趙雲は頬を赤くして、煉龍を眺めていた。

「…星ちゃん…まさか…」

「…星」

「な、何が言いたい！」

程？の黒い笑みと戯志才の紅い顔を見れば、二人が何かを言いたい
のか解り、赤くあまり怖く無い顔で二人を怒鳴り睨みつけた。

「ともかく、此処で知り合ったのも何かの縁ですから、一緒に旅を
して食事をしません？」

「う、うむ！それは良い！」

…二人にからかわれたから、話しの流れを変えたいのだろうな…

「…星ちゃん、本当はそのお兄さんともっと一緒に居たいだけなん
じゃないんですか？」

「大胆だな、星…ぶっふー！！」

「稟！風！」

「ほら、稟ちゃん、とんとん」

趙雲の少し慌てた様子を見て、何となく彼女の目的を理解するも、それ以上の攻撃を程？が仕掛け、郭嘉は何かを想像（妄想）し、鼻血を吹き出せば、慣れた様子で程？が郭嘉の首筋を叩いた。

「…何とも賑やかな一行だな」

ただ一人、煉龍だけが我関せずとこの惨状を眺めていた。

「…しかし、村に到着したら夜になったな…もし良かったら、出会いを祝して夕食を一緒にどうだろうか？」

「おお〜！お兄さん、太っ腹」

「…おい、ちょっと待て、誰が奢ると言った。」

「夕飯をご馳走していただけるとは…とても懐の深い男とは…この超子龍、惚れてしまうぞ？」

「解りました。俺が出す…」

「すまない…藍霸殿」

戯志才の慰めの言葉を聞き、煉龍は財布の中の路銀を確認すれば、声を殺してさめざめと泣きながら飯屋にへと入って行った。

…さすがに酷くね？初めて会った人間にたかる何て…

戯志才の慰めを聞きながら、飯屋で飯を頼めば、趙雲は酒とツマミ（メンマ）も一緒に頼んだ。

…おい、趙雲よ。少し自重つてのをしろ…

趙雲に軽い殺意を込めた視線を遅れば、視線に気づいた趙雲はニヤリと意地の悪い猫の様な笑みを見せ

「おや、藍霸殿…美女と飲食を共にできるのだ。…細かい事を気にしていたら、美女は墮ちぬぞ?」

…だからって、一見の奴に集られて笑顔で過ごす程俺って、お人好しじゃないんだよね…

「…星、確かに我等の路銀の出費を少しでも抑えるのは良いが、少しは藍霸殿の事も考えろ」

「まあまあ、稟ちゃん…お兄さんもこんな美女・美少女と一緒にご飯を食べられるのですから、不満は無いと思いますよ?」

「…集るの前提で、話を勧められなかったらな」

「ぐう」

「…寝るなー!」

「おお〜つい、うとうとと!」

出逢つて間もないと言つのに、戯志才と煉龍は長年コンビを組んだ芸人の如く、ツッコミを入れれば注文した料理と酒が運ばれてきた。

「では、我等の出逢いに祝して、乾杯」

「…乾杯!」

2時間後

「…しかし、お主が天龍の化身だったとは…」

「何を言う…常山の昇り龍の趙雲さんだって凄いじゃないですか…

最初のあの突きの速さなんて…」

酒が入り、程良く酔いが回れば武人同士、趙雲と仲が良くなり、密着しては互いに酒を飲み続けた。

…しかし…意外とチートな肝臓だな…酒は飲んだ事が無いのに何で酔わないんだ？

酒を結構な量を飲んでいるのに関わらず一向に酔わない事に少しの疑問を持ちながら、杯を明けながら酒を楽しんでいれば、思い当たる事が一つあるのか、背中に一筋の汗を流した。

…まさか、あれか？何度も殺されかけたら、体の方がちょっとやさつとの事じゃ…

煉龍がまさか…と思う事があるも、なぜ、煉龍が酔わないかは…何れ明らかになる…

「藍霸殿…こんな美女と酒を飲んでいるのに、考え事とは…案外無粋なのだな」

「自分で美女と言いますか」

「自信が有るのだから、自分で言っても構わぬだろう…それとも、藍霸殿は、私みたいな美女とは酒でなく…共に一夜を過ごす方がお望みなのかな？」

意地悪く笑いながら趙雲が問い掛ければ、趙雲の問いを聞き、煉龍は意地悪く口の端をつり上げて笑い

「ええ…そうですよ。俺は趙雲どのが好みですので…」

「へっ…？」

「おおく大胆ですねくお兄さん」
「はうわあ?!」

煉龍の言葉を聞き、趙雲は固まり、程？は茶化し、郭嘉は何を想像（妄想）したのか、天井にも届く勢いで鼻血を噴出すれば、椅子に寄りかかって気絶してしまった。

「…趙雲殿…自分からあの様な事を言うとなれば…誘っているとつても良いのでしょうか？」

煉龍は趙雲の頬に手をそつと添えれば、相手の眼に視線を合わせて静かに問い掛ければ、趙雲は顔を赤くして、口を鯉のように開閉して固まった。

「…趙雲殿…」
「ら、藍霸殿…」

艶のある声でそう問いかければ、趙雲は意識を取り戻し自分が言った言葉の意味に完全に理解し、恥ずかしさで顔を伏せれば、煉龍は立ち上がった。

「趙雲殿…二人で一緒に飲み直しません?…せつかく、趙雲殿がお誘いして頂いたので…」

「あ…ああ、そうだな」

そう言い、趙雲は悟った

常山の昇り龍が天龍に喰われる…それも、逃げられず跡形もなく

…

煉龍は趙雲の手を掴めば優しく立たせ、細い腰に腕を回した。

「…昇り龍の自慢の一品…夢中になって味あわせて頂きます。」

「う…うむ…存分に味わってください…」

そう言い、二人は部屋にへと向かった。

「…お兄さんも大胆ですね…さて、私達も部屋に宿に戻って寝ますか」

鼻血を勢い良く出し続けて気絶する郭嘉を連れて自分達の部屋へと戻って行った。

…その夜、一組みの龍は互いに心から求め合う関係となった。

からかつのは良いが、ちゃんと人を見て選ぶ…じゃないと、大変な事になるぞ。
ついに、二人目が堕ちました。そして…次辺には董卓軍編に入ります。

クールや余裕の表情を浮かべる人程、実は表情とは逆なんだよね。(前書き)

えっと、少し性格が壊れています…OK？

クールや余裕の表情を浮かべる人程、実は表情とは逆なんだよね。

「ん…暖い…」

どうも…煉龍です…この世界に来てから、凄く幸せで眠り続けたいです…心地良い体温をしている青髪の眠っている美女を抱いてベットに寝ているんですが…

「もう少し寝ていよ…」

ベットの中で眠っている青髪の美女、趙雲を抱き締めて、俺は甘える様に数度、趙雲の頭に頬ずりをしてまた眠りについた。

side 星

「…困った。」

本当は藍覇が起きる前から起きていたのだが…

「あんなに安心しきった寝顔の者を起こせる訳ないだろう。」

ため息を吐き出して、眠っている藍覇の顔を見れば、扉の方から二人分の気配を感じ扉に視線を向ければ、ニヤニヤした表情を浮かべる風と鼻血を出している稟が居た。

「おやおや、来るのが遅いと思っていたら、星ちゃんのお相手が星ちゃんを離さずにまだ、お眠だったからなんですわ〜」

うつ…この状況はさすがに不味い…なんとか、この状況を打破しないと

「藍覇…起きぬか…」

「…ん…あと五分…」

「おやおや、まるで新婚の夫婦みたいなやり取りですね。」

煉龍の寝言を聞いて、更にかう程？の言葉を聞き

…新婚だと…確かに、この者の武は凄まじいし、昨晚の伽も最初は私がリードしていたのに、いつの間にか奪われて、最後は頭が真っ白になって…

昨晚の出来事を確りと思えば、趙雲は顔を赤らめれば、程？はニヤリと口の端を釣り上げて意地悪く笑えば

「おやおや、星ちゃんは完全に骨抜きにされたみたいですね。」

「風！」

からかう程？に珍しく主導権を握られっぱなしで、顔を赤らめて弄られる趙雲が騒いでいれば、当然、眠っている人間は起き

side out

「うるさい…」

…一体誰だ？部屋の中でこんなに騒いでいるのは…

「おつ、星ちゃんの旦那様が起きたみたいですね。では、私と稟ちゃんは今先に食事を取っています。」

「風！」

…ん…少しは静かになった…

眠たい目を擦り身を起こせば、上体を伸ばし凝り固まった関節を鳴らして完全に目を覚ました煉龍は衣服を着るために寝台から降りた。

「趙雲…早く、行かないとまた、程？にからかわれるぞ？」

「むっ…からかわれつぱなしと言うのは私の性分じゃないから…解った。直ぐに風達の所に行くか。」

そう言い、趙雲も衣服を着るために寝台から降りれば、煉龍は何かを思いつき、口の端を釣り上げ

「趙雲」

「なんだ？藍覇」

「何時もの服は止めた方が良いと思うぞ？…じゃないと、程？に常にからかわれるぞ？」

楽しそうだが意地悪な笑顔を見せれば、趙雲は言葉の意味を理解して、真っ赤な顔で睨みつけられ、素早く衣服を着て龍牙に手を伸ばし

「それは藍覇のせいであろう…！！！」

「ちよ！武器を持って襲いかからないで！」

「問答無用！」

ちよっと…！！あの母の元から離れても俺の朝はこんななのか

！！！！

「おや、随分と遅かったですね。まさか、風達が去った後、もう一戦をしたのですか。」

紅い顔の趙雲と肩から息を上下に動かして息をしている煉龍を見て、さらにからかう程？を見ては、趙雲・煉龍は睨みつけた。

「おお、怖い、怖い…そろそろ、からかうのを止めないと星ちゃんだけでなく、お兄さんからも襲われそうです。…あつ、襲うと言っても、性的に。」

「風！もう良い！」

ええ、もう本当に止めてください…俺のHPはもう0よ！

程？からのからかいをなんとか凌ぎ、少し遅い朝食を注文すれば、程？は椅子に座ったまま鼻血を出し続けている戯志才の首筋を叩いて覚醒させ、煉龍達は朝食を取り始めた。

「…で、趙雲達は何処に行くんだ？」

「風は陳留の曹操様の元へ行こうと思っっています。」
「私もだ。」

飯を食べながら、煉龍が問い掛ければ、戯志才と程？は行く場所が決まっているのかすぐに答えを返してきた。

…あの百合勅史の元に行くのか…

「お兄さんは何処に行くか決まってるんですか？」

「ああ、俺は洛陽に行く予定だ。」

ゴトン！

煉龍達が音のする方向を見れば、趙雲が茶碗を落として、ショックを受けた表情を浮かべていた。

「…えつと、趙雲は…」

煉龍に声をかけられ、趙雲は何時もの表情を浮かべ、何とか平静を保とうとしていた。

「私は幽州に行く予定だ…藍覇も一緒に行かぬか？」

趙雲の誘いを聞き、藍覇は自分が今、原作のどの部分に居るかと考えていた。

…えつとこの後つて、趙雲がハムの人の客将になって、劉備達と合流するんだから…ちつ…本当は魏延にも会いたかったけど…今、確実に洛陽に行かないと！

「すみません、趙雲：貴方みたいな美女と一緒に居たいですが…少し、やる事を思いついたんですよ。」

「おや…折角の美女の誘いを断るとは随分、無粋な方になってしまわれたのだな。」

すまなそうな表情で、趙雲の誘いを断れば、趙雲は少し残念そうな表情を浮かべからかう様な口調で茶化した。

「すみません…だけど、その代わりに俺の真名を預ずけます。」

藍霸殿と別れるのが嫌で、一緒に居たいと言う私の我侷を断られ、拗ねたいたらまさか真名を教えて頂けるとは思わなかった。

「お兄さん、ついでに風達の真名も交換しません？」

「すいませんが…俺は趙雲とだけ、真名の交換をしたいんですよ。」

…だが、最近はずのいい友人でも真名の交換が有るから…

「あつ、ちなみに俺は将来を考えても良いって人だけに教えますからね。」

……………はっ？

煉龍の言葉を聞き、私の頭は真っ白になった。

「ふっ…たかが1日での交わりでその様に思っ頂けるとは…それに、私と藍霸殿は別れるではないか。」

強がりですう言えば、煉龍は唇の端を釣り上げて猫の様に笑った。

「まあ、確かにその通りですね…ですけど、俺は予感がするんですよ。…俺と趙雲は、また逢うと」

煉龍がそう言うと、趙雲は顔を赤らめていた。

「趙雲、俺の真名は煉龍…預かって貰えませんか？」

「あつ…ああ、私の真名は星だ。」

「改めてよろしくな…星」

…もしかして、煉龍って…いや、もしかしたら、私以外にも…だけ
ど…

「…えっと、お兄さん…星ちゃんが何か百面相をしているんですけ
ど…」

この時の私は、風の少し失礼な物言いも気にはならなかった。

…この昇り龍を捉えたのですよ。確りとその予感を当て、娶って貰
うぞ。

side out

…えっと、星ってこんなキャラでしたっけ？

「…まあ、ともかく…俺はそろそろ行きますね。」

「ばいばいです。お兄さん」

百面相をして、意識を飛ばしている星と鼻血を吹き出し続けている
戯才志に軽く苦笑を浮かべて、立ち去れば、洛陽に向けて旅立った。

…後に、一匹の龍がからかわれ続ける旅になったが…それはまた別
の話

天魔龍の飛翔（前書き）

すいません…遅くなりました。

ですが、この話はかなり重要な部分だと作者は思っています。

感想を貰えると嬉しいです。

天魔龍の飛翔

…ども…煉龍です…母さんが言っていた言葉の一旦の意味が解りました。

洛陽へと向かう途中、煉龍は少ない路銀で食料を買おうとしたが断念した。

「はあ…この地方の太守は酷いな…何をしているんだ？」

白凰を揺られて辺りを見渡せば、ため息しか出ない…何故なら…

廃屋と化した家屋

荒れた田畑

放置されている様々な死体

そして…何より頭にきたのが…

絶望と諦めの色しか浮かんでいない人々の目

「此処の太守…いや…地主は何をしてんだ！」

憤っても仕方ないと思い深呼吸をして落ち着ければ、今、自分が見ている光景を目に焼き付けた。

闘うことしか出来ない自分を少し恥じた煉龍は落ち込みながら白凰を歩かせていれば、かろうじて家として機能している少し先の家から何か割る音が聞こえ、そこに視線を向けた。

「や…止めてください…！その子は…」

視線の先には、明らかにゴロツキと言った容貌の二人が年若い娘を

連れ去ろうとし、その娘の父親であるやせ細った老人が、肉付きの良い若い男の脚に縋り付いている光景だった。

「うるせえ！税も収められねえ奴が悪いんだ！文句が有るのなら税を納めてから言いやがれ！」

「そんな…！三日前にも家財道具をほぼ全て持って行き、更に税だと良い娘まで攫っていくのですか…！」

「攫って行く？人聞きの悪い…この娘は税の代わりにワシの下で奉公させてやろうと言うワシの慈悲深さを理解しておらぬようじゃな！」

地主であろう男は脚に縋り付く老人を蹴り飛ばし、ゴロツキを伴い自分の屋敷がある方向に歩いて行けば、老人は蹴られた部分を押しさえながら涙を流し、連れ去られていく娘に手を伸ばした。

「優歌……！」

「父さ……ん……！」

ゴロツキに引き摺られながらも、父親に助ける女性の悲痛な叫びは無情にも辺りに響き渡るが…誰も彼女を助ける者は居なかった…そう…煉龍も含め…

「……」

老人は蹲り、己の無力を呪った、時代の荒廃を呪った。

「……おい、おっちゃん…今の事情を詳しく聞かせてくれねえか？」

蹲る老人に天龍戟を片手で持ち、肩に担いだ煉龍は近づき、立ち上がらせる為に手を伸ばした…

「ありがとう…じゃが…その武器があるのじゃら…何故、娘を助けてくれなかった！」

老人の恨みの籠った目を向けられ、煉龍は気まずそうに視線を空したが、老人の恨みを受け止めるかの様に老人の目を見た。

「事情を知らないからだ…そして…俺は善人じゃねえ」

「な…なら、どうしたら助けてくれる…！」

「…なら、聞く…お前達はただ救いを待っていただけなのか？」

「…」

「何故、自分達で動こうとしなかった？」

「…さい…るさい！五月蠅い！乱を起こして何になる！乱を起こして妻や娘を殺されるよりも悲惨な目に合わせて殺されたくは無いと云うワシの気持ち解るか！！」

「なら、聞く…死ぬ覚悟はあるか？」

「…妻は病で死に、娘もつい先程攫われた…今更、ワシに失うものは何もない。」

煉龍の問いかけに、老人はまるで煉龍を敵を睨むかの様に睨みつけて答えた。

「…もし奪われた物を取り返したい！！奪っていった者に一矢報いたい！！と思うなら…俺とこの白馬を探せ！俺はこの近辺に居る！！」

叫び声で無いが、確実に辺りに居る者に響く咆哮を聞き、老人と回りに絶望しか目に浮かべていない者達の目に久しぶりに絶望以外の感情の色が浮かび上がった。

凧達と居る時は役人からは天龍とし目覚め、賊からは魔龍とし目覚

めた。

だが、この地の悲惨さ、人の醜い一面を見て、煉龍は目覚めた。

賊からは天龍と、役人からは魔龍とし…

藍霸鳳、煉龍は完全に目覚めた不完全な天魔龍の化身から、完全なる天魔龍の化身へと。

老人に背を向ければ、俺は背後から人の動く気配を感じたが、それを無視して近くにある倒壊した家屋に腰を下ろした…

だが、一刻も待たない内に老人がああ咆哮を聞いた人間が集まってきた…手には各々の武器となる物を携えて

「…早いな…」

「当たり前じゃ…！此処に居る者は全員、あの地主に家族を奪われ…！家を壊され…！未来を奪われたのじゃ！」

「そつだ！俺の娘はあの地主に連れていかれ、一週間後には死体となって地主の屋敷から出てきた！」

「俺の妹は…あの地主の取り巻きに…！」

「僕はお母さんを連れて行かれそうになった時、あの人のお父さんにお父さんが袋叩きにされて…僕はお父さんもお母さんも失った！」

…此処の地主…良く今まで無事だったな……だけど、今日までの命か…

煉龍は村人達の恨みの声を聞き、地主の屋敷に向かうのを少しだけ先送りにした…

彼は確信していた…

『人数は確実に増える！』と

side 地主

全く…最近の奴等は口だけで確りと税を納めぬ…誰がこの村で一番偉いと知らぬのか？

地主の男はため息を吐き出して、手を叩けば侍女を呼び出した。呼び出された侍女の顔は青く腫れ上がっており、侍女も瞳に恐怖の色を浮かべて、地主の行動に怯えたいた。

「遅いんだよ！このノロマが！呼んだらとつと来やがれ！」

バキッ！

「キヤ！」

地主は憂さ晴らしで侍女を殴り倒せば、苛立った様子で椅子に座った。

最近は税を回収しても思った以上に集まらない…女も大体の綺麗所は侍女として攫ってきたから、後は村にいるのはガキとジジババだけだ…

「地主様！大変です！村人達が反乱をお越しました！」

「だったら、早く鎮圧しないか！何の為に高い給金を払ってる！反乱をお越しているのは、ジジババだけだろう！」

「それが…先頭に立って、主に戦っているのはジジババじゃないんです！一人の若い男です！」

「だったら…困んで、殺さないか！」

「ですが…」

ちっ…どいつもこいつも使えない奴め……待てよ…この村には若い男は居なかったはずだ…って事は、路銀目当ての旅人か……なら、簡単だな…ジジババどもの恐怖にゆ歪む顔が目には浮かぶ。

地主の男は少し考え込み、口の両端を愉快そうに釣り上げれば立ち上がり外に向かった。

s i d e o u t

s i d e 煉龍

おお…かなり集まったな…此処は士気でも上げる…

自分の目の前に居る村のほぼ全ての人間を見て煉龍は白鳳に跨り、武器を高く掲げた。

「お前達は命を捨てる覚悟は有るか！？お前達は取り返したいものは有るか！？お前達は地主を許せるか！？」

煉龍の叫びを聞き、村人達の目には怒りの光りが灯った。

「ワシ達は地主の奴隷じゃない！」

「あいつのせいで、娘を奪われた！」

「あいつのせいで、俺の子供は餓死したんだ！」

次々と上がるのは地主への恨みの声、それも深い恨みなのか、目には殺意しか浮かんでいなかった。

「なら、今こそ立ち上がる時！行くぞおー！」

『おおー！』

「皆のもの！立ち上がれ！今こそ戦いの時！」

煉龍が掲げた天龍戟を指し示せば、村人達は地主の屋敷を目指して歩きだした。

「しかし、今日も暇だな…」

「そうだな…いつもなら、娘を返しに来てくれてって、泣きついてくるジジイかババアが着て、ひまつぶしで殴り殺せたのにな」

楽しそうな表情で話しているも、目の前の人の群れを見て二人は固まった。

「…おい、増援を呼んで来い。…俺は地主様にこの事を報告する。」

「解った。反乱なんか起こしやがって…痛い目に逢わないと解らない様だしな」

男達は屋敷に入っていった。…自分達がいたぶる者だと勘違いしたまま…

「…たく…馬鹿には馬鹿が集まるものだな…」

屋敷に居た地主の用心を目の前に、煉龍はため息を吐き出し、天龍

戟を肩に担ぎ、自分に付いてきた村人達には、背中で屋敷に居る地主、地主を守る（やくにん）に殺気で、

さて…此処は、景気良く士気を鼓舞して…潰す！

「近き者は眼を見開け！！遠き者は音に聞け！！俺は姓は藍！名を覇！字は鳳！得物はこの天龍戟！！龍の角で敵を貫き！牙で断ち！爪で切り裂き！尾で叩き伏せる！恐れず俺に掛かってくるのなら、遠慮せずこの天龍の爪牙角尾を馳走してやろう！そして、俺に付いてきた者達よ！恐れず、俺に続け！お前等の勝利！この天龍が保証してやる！」

吼えた。

声で

魂で

殺気で力の限り吼え、敵には、恐怖を村人達には勇気を与えた。

「行くぞ！」

煉龍は白鳳を走らせるまでもないと判断し、天龍戟を肩に担いで一人で、敵にへと向かっていった。

「へっ、一人だ。楽勝だな…！」

「ぶっ殺せ…！」

煉龍の名乗りを聞き、用心棒達は恐怖を振り払うかの様に、数人で斬りかかりに行っただが…

ズダン！！ボゴォ！！

「雑魚には用はねえー！地主を出せえー！」

煉龍に襲いかかって来た半数は天龍戟の龍牙で両断され、残りの半数は龍尾により吹っ飛ばされた。

「ひっ…相手は一人だ！困めー！」

賊の一人が、煉龍を殺そうと叫べば、周りは恐怖の対象を消そうと最初以上の数で困い、襲いかかるも…

「甘いんだよ！！地獄の亡者に自慢しな…この藍霸鳳の龍刃乱舞を喰らった事を！」

天龍戟を振り抜き、前面の敵を両断し、勢いを殺さずに持っていた天龍戟を頭上に持ってきて、バトンの様に回転させ

ズシャ！ボゴオ！ズシャ！ボゴオ！

龍角・龍牙・龍尾で困っていた用心棒達の命を容赦無く奪っていった。

「ひっ…ば…化け物だ！」

「こんなのに勝てる訳ねえ！相手にしてられるか！」

「ちくしょうー！金を貰って、ジジババを痛めつける楽な仕事だと聞いたのに、やってられるかー！」

煉龍の強さを目の当たりにして、用心棒達は散り散りに逃げた。

「おお…龍じゃ…」

「天は龍の化身を俺達を助けるために…」
「…ありがたや…」

逃げて行く賊を見て、老人達は自分達を虐げてきた賊を容赦なく殺していく煉龍に感謝の視線を向けていた。

「そこまでだ！」

「…あの野郎！」

「人でなし…！」

だが、その視線も一人の男の出現により、憎悪の濃い視線にへと一気に変貌した。

「……………お前が…此処の地主か…？」

天龍戟を振り回すのを止めて、肩に担げば煉龍は現れた男に冷めた視線を向けた。

「此処の地主の王虎河と申します…しかし、お主の武は何とも凄まじい事…音に聞く、飛將軍呂布にも負けぬその武…私の元で奮ってくれませんか？金は言い値を払う」

……………金で俺を買収する気が

「もし、来てくれるのなら、酒も女も金も私が世話をする。」

地主の言葉を聞き、村人は殺気立った。

「…そうだな…確かに路銀の足しにはならないな」

そう言い、煉龍は村人達から離れて行き…

「なっ！？お前はワシ達を救ってくれたのでは！？」

「お前もやはり金かー！」

煉龍は背に村人の怨嗟の叫びを浴びつつ地主に近づき

「こつちに来たって事は契約成立だな！」

地主は村人の絶望に染まった顔を見て、嬉しそうな笑顔を浮かべた。

「だが、断る！」

俺を金でどうこう出来ると思っているのか…アホだな…

煉龍の言葉を聞き、呆然とした表情を浮かべ、煉龍はとても良い笑顔を浮かべて、空いている手で拳を作り

ガッ！

笑顔で地主を殴り倒した。

「貴様！！この私を殴ってタダで済むと思っているのか！？」

「思ってるんだよな、これが」

なんせ…お前を守る者なんてもう居ないんだからな

「さて…皆さん、復讐する地主を守る者は居ません。復讐したいのなら、どうぞ…俺は居ないと思えますが、地主を守るために来る人間を倒しますので。」

煉龍はそう言い、地主から離れて行けば、地主の回りに村人が近づいてきた。

…殺気と恨みを持って…

「待て…話せば…」

「お前のせいだ！」

「俺達はお前の道具じゃない!!！」

「お前のせいで母が死んだ！」

「お父さんを返して!!！」

「妻を返せ！」

「姉さんを返せ！」

「娘を返せ！」

「兄さんを返せ!!！」

次々と浴びせられる恨みの言葉と暴力に地主の男は身を丸めて耐えるしか無かった。

「助けてくれ!!助けてくれたら、言い値で金を出す!!！」

地主は煉龍に命乞いをするも…

「生憎…俺は、俺の正義でしか動かない…例えその動きが賊の動きだとしても…」

そう言い、煉龍は地主の屋敷に向かった。

地主の男は村人達によって、友人や親でも解らない位にボコボコにされて…息を引き取った。

さて…地主の屋敷から、食料と金がある程度とって、出発でもする

か

だが…彼は知らない、逃げた用心棒達が他の村に助けを求めたせいで、自分が指名手配を受け、龍の装飾と目付きの悪さで、魔龍の化身と言つ二つ名で呼ばれ、救われた村人達からの噂で天龍の化身と呼ばれる様になり…彼は天魔龍の化身の二つ名を得た事に…

天魔龍の飛翔（後書き）

つぎに洛陽に入りたいな

煉龍：それはどうかな？

…入りたいです（泣き

食事の邪魔をするのは覚悟しよう…何故かって？それは食事を邪魔された時の怒

漸く洛陽編突入です。

ここからは、董卓 に突入です。

食事の邪魔をするのは覚悟しよう…何故かって？それは食事を邪魔された時の怒

どうも、煉龍です。今はお昼の真っ最中です。

パチパチッ

「…そろそろ、頃合だな。」

程良く焼けた肉と魚を見て、煉龍は嬉しそうに程良く焼けた肉が刺さった串を手に取り

「いただ」ポトツ…パチパチ

だが…手にとった串は途中から折れて、刺さっていた肉は火の中に落ちてしまった。火の中に入った肉を諦めて、別の肉の刺さった串を手を取れば、その手に持つ串も途中で折れて

「……………いただ」ポト…パチパチ

だが、その肉も火の中に入れてしまえば、多少、殺気だつて別の串を取ろうとすれば…

ドシャ！！パラパラ…

焚き火に何かが突っ込んで、焼いていた肉も魚も全てが駄目になってしまった。

ふふふつ…人の楽しい、この世界に生まれてから唯一の安息の時間と言っても過言でない俺の飯の時間を邪魔をするとは…

「命はいらぬ様だな…どこのどいつかは…しらねえが…楽には死なせねえぞ！」

天龍戟を担いで、真つ黒な雰囲気を纏えば、煉龍は矢や飛んできた何か…黄巾の死体が飛んできた方向に歩いて行った。

side 呂布

…沢山居る…この賊を全部殺せたら、月に迷惑が掛かるの居なくなる。

万を超す黄巾の賊の半数を殺してもなお、無双を誇る呂布を逃げ惑い、自分に向かつてくる黄巾の賊を黙々と方天戟を振るって殺していけば、黄巾の賊の密度が薄くなっている事に気づいた。

…この薄さになるのは…もっと後のはず…誰か、恋の事を助けてる…

自分が相手する黄巾の賊の数が減っている事に気付いた呂布は、自分の事を助けてくれる援軍の存在を本能で感じ取った。

…終わったら、お礼言わないと…

呂布は早く戦闘を終わらせて、助けてくれた者にお礼を言おうと意気込めば、黄巾の賊を殺していく速度を上げていった。

side out

side 煉龍

飢えた獣程恐ろしい物は無い…もし、飢えた獣に遭遇したのなら、食べ物で気を逸らして逃げるべきだ。

…だが、それが食事を邪魔された飢えた人間だったなら…答えは一つ

「人の飯の邪魔をしやがって…覚悟しろー！！！」

煉龍は黄巾の賊の群れの中に飛び込めば、容赦なく振るい、黄巾の賊を斬り飛ばし、吹き飛ばし、叩き潰していった。
そう、答えは容赦ない暴力に晒されるだ。

「くっ、いきなり現れたと思ったら…！おい、もつと人を呼べ！」

「無理だ！後ろには呂布も居るんだぞ！」

「くっ…テンホーちゃん達を殺させる訳には…！何とかして俺達で時間を稼ぐぞ！」

「おおー！！！」

自分達のアイドルの為に命を書ける黄巾の賊…もとい、追っかけ達は肉の壁となり、必死になって煉龍・呂布の攻撃に耐えていた…だが…現実は無情な物だった。

「邪魔…」

「めーしーのうーらあーみいー！！！」

遂に、呂布が煉龍が暴れている所にたどり着き、ほとんどの黄巾の賊は討ち取られてしまった（内訳呂布7：煉龍3）

side out

side 呂布

…あの人だ…

呂布は回りに黄巾の賊の死体の中で天龍戟を肩に担いでいる煉龍を見て確信した。

…だけど、あの人…お腹減ってる…恋を手伝ってくれたお礼しよ…

呂布は方天戟を肩に担ぎ煉龍に近づいて行った。

side out

side 煉龍

何処だあ…人の飯を邪魔したのは…何処だあ…

煉龍は食事の邪魔をしたと思っている黄巾の賊を探して殺気だっていた。そこに一人の一人近づく者がいた。

「……………恋を助けてくれてありがとう」

黄巾の賊の討伐をしていた呂布だった。

「助けた訳じゃない…飯を邪魔された腹いせだ。」

飯を邪魔された事が相当腹が来ていたのか、煉龍は機嫌が悪そうに

目を細めていた。

「…だけど、恋を助けてくれたのは変わらない…だからお礼」

「…なら、言葉に甘えるよ…で、名前は何て言うんだ？流石に、礼をしてくれるって言う人間の名前を知らないのは失礼だからな」

「恋の姓は呂、名は布…字は奉先…真名は恋…」

「…あつ…空腹で気が立ってしっかり見てなかった…って…事はこの八つ当たりで死んでいった人達は…黄巾の本隊か」

「…名前」

「はい？」

「名前…教えて…」

「あつ、名前ね…姓は藍、名は覇、字は鳳だ…で、何で真名まで俺に教えるんだ？」

「…恋と一緒に戦ったから…それに…藍覇が好きだから」

「…つう！？幾ら、紙様（笑）に頼んだとは言え…こつもストレートに言われるとは！」

呂布のストレートな言葉を聞き、煉龍は顔を赤らめた。

「…藍覇は恋の事…嫌い？」

潤んだ目で見つめられ、煉龍は萌死にそうになった。

な…なんだ！？この可愛いのは！萌死ぬ！

「俺の真名は…煉龍だ。」

辛うじて自分の真名を相手に告げて、何とか真名の交換をした。

「れんりゅう…れんは恋と同じ漢字…？」

「恋の真名はどう言う字を書くの？」

煉龍がそう問いかけると、恋はしやがみ、指で恋と書き

「…恋の真名はこう書く…」

「じゃあ違うな…俺の真名はこう書く」

そう言い煉龍は地面に煉龍と書けば、恋は悲しそうな表情を浮かべた。

「…煉龍と恋のれんの漢字が違う…」

「ちよつと、同じ字の真名は中々無いんだから泣かな」

「恋殿を泣かせたのは誰だあー！陳宮キーンック！」

ドガツ！

ガツ！

「ぶべっ！？」

後頭部に跳び蹴りを喰らい、顔を地面に打ち付けられれば、追撃とばかりの後頭部にストップピングを喰らい続けた。

「この！この！よくも恋殿を泣かせたな！それ以上に馴れ馴れしく恋殿の真名を呼ぶとは万死に値するです！」

情け容赦の無いストップピングを頭に受け続け、空腹なものも手伝い、煉龍のこめかみに井マークが浮かび上がり

ガシッ

煉龍は喧しく騒ぐ陳宮の頭を掴めば

「このチビ…人が大人しくしていれば…」

「何をするのです！離すのです！」

メリッ！

「うによおお~~~~~！！！」

容赦なく握り締めた。

「このチビ助が…さつきからよくもやってくれたな…お前には初対面の人間に蹴りを入れるのが常識なのか？それと真名を交換した位で万死に値するんなら、この世の全ての人間がその基準に当てはまるぞ。」

「痛い痛い、恋殿〜！」

陳宮を握りながら立ち上がれば、アイアンフロアバタバタと手足を振り回して恋に助けを求めた。

「…ネネが悪い…」

「そんな〜！恋殿〜」

「お前には助けを求める前に何を言うべきか解っているのか？いや、解って無いな…じゃなきゃ、第一声がそれじゃねえからな、おれ、お前は反省しているのか？反省してねえな…じゃなきゃ、今現在進行系で、痛いなんて連呼してねえよな？さて、心優しい俺が問いか

ける…言つべき言葉は？」

「痛いのです！さつさと離すのです！」

「有罪」

メリっ！！

「ふみや～～～～！！！」

「ネネ…」

「うう～～～！！ごめんなさいです！」

パツ！ドサツ！

「いったあ～～！もうちょっと優しく降ろせです！」

「もう一回、頭蓋骨を握り潰されたい様だな」

煉龍が手を握り開きを繰り返して、軽い脅しをかければ陳宮は見事な土下座をした。

「すみませんでしたー！」

…ちっ…何て判断の速い奴だ…

陳宮の土下座を見てため息を吐き出せば、恋が近づき空いている手で煉龍の手を掴んだ。

「…行こう…お腹減った。」

「…そうだな…所で、何処に行くんだ？」

「洛陽」

「丁度良かった…俺は洛陽に行くところだったんだ。…もし良かったら、良い働き口を知ってたら紹介してくれないか？」

「…(コクリ)」

恋の頷きを肯定と取れば、煉龍は安心した様に笑えば恋は僅かに顔を赤らめて歩き始めた。

「行く…」

「あつ、俺は馬キリンが居るから馬キリンに乗って行くか？」

煉龍の言葉を聞き、恋は少し悩めばジツと繋いでいる手を見つめた。

「はあ…白鳳！」

大声で白鳳を呼べば、白い巨体を翻せて、白鳳が駆け寄ってきた。

「ぶるるっ」

「…おつきい」

「ああ、こいつの名前は白鳳って言うんだ。…白鳳、洛陽への道が解ったから行くぞ。」

そう言い、煉龍は歩き始めた。

「…何で？」

「…たまには歩いて行きたいから…恋…洛陽まで案内して」

「…！(コクコク)」

嬉しそうに恋が頷けば、洛陽に向けて歩きだし、白鳳も煉龍達に付いていく様に歩き始めた。

「…らー！ねねの事を忘れるなー！」

食事の邪魔をするのは覚悟しよう…何故かって？それは食事を邪魔された時の怒

漸くここまで来ました。

感想ありがとうございます。

しかし、バカテストの2本とは少し大変です。

大変ですが、感想を頂けると頑張ろう！って気になります。

そして、感想をまっています。

自分の二つ名って良いものか悪いものか判断がつきにくい……だって、俺の二つ々

董卓 に入りました。漸くです。∴漸く此処までできました。

後書きにお知らせあり

自分の二つ名って良いものか悪いものか判断がつきにくい…だって、俺の二つ名

どうも、煉龍です。今、恋と手を繋いで洛陽の市場を歩いています。店のおっちゃんとおばちゃんからは、微笑ましい物を見るように見られて…後ろからは…指すような視線を感じます…ええ、殺気付きで……………無視していますが（笑）

「いい加減に離すのです！」

「…ええ…嫌だ。」

陳宮からの叫び声を右から左に受け流せば、俺は恋に引っ張られながら、洛陽の街を見回した。

「活気が有って良い街だな。」

「うん…月達が頑張ってるから…」

相当民の為になる政策をしているんだな…かなり悩んで、身を粉にして…でなきゃ…

「こんな笑顔と活気に溢れない…」

「うん…月達、頑張ってる…だけど、恋は戦う事しか出来ない…だから、恋は戦って、月達を守る。」

そう言いながら、歩いている恋の横顔はとても儂げで…とても危なっかしくて…とても……………可愛らしく綺麗だった。

…そう言えば、原作でも月達は善政を布いていたのに、デカドリルサイドツインテールの贅沢馬鹿と蜂蜜アホ娘のせいで…

「…恋…俺も力になりたい…」

「…!!…なら、月達と逢う。」

「なっ！恋殿！こんな学も武も全く無さそうな弱っちい脳筋を紹介しても何にもなりませんぞ！」

…このチビ…人の実力も知らずに…恋の発現を聞き、煉龍は驚き、

陳宮が驚きながらサラッと貶せば、煉龍は天龍戟を地面に突き刺し

「…誰が脳筋だ？このチビ」

遠慮無く、笑顔で陳宮にアイアンクローをして、持ち上げれば

「痛い痛い！！直ぐに暴力に頼るから、脳筋だと言つのです！」

相手の言う言葉にも一理あるなと思うも、相手の頭を離して地面に落とせば天龍戟を持った。

「もっと優しく下ろすのです！」

「そうだな…お前も女の子だから優しく下ろさないとな」

「解ればイイのです。」

「だが、断る！お前の様な奴には肉体言語でのOHANASIで十分だ。」

陳宮にこれからも遠慮無く制裁を加えていくと宣言すれば、恋が少し拗ねた表情を浮かべて洛陽城へと向かっていった。

「煉龍…会わせたい人が居る…」

「恋、引つ張るな」

恋に引つ張られて落葉上に入り、歩いていけば、ある部屋の前に前

まで来た。

「恋殿！此処は！」

その部屋の前まで来ると陳宮はその部屋の主が誰なのかと理解して慌て始めた。

「…此処であつてる…」

「しかし、こんな何処の馬の骨とも言えない暴力を直ぐに振るう脳筋を会わせる訳にはいかないのです！」

その人物が相当重要なのか、陳宮は食い下がると恋は首を横に振った。

「大丈夫…煉籠、恋達の味方」

啞然とする陳宮を他所に恋はそう言い、その部屋の扉を開けて、部屋に入つて行つた。

side ????

はあ…時間が足りない、駒が足りない、状況は日々悪くなる一方…

その部屋で、月に見えない様にため息を吐き出した。

「詠ちゃん…無理しないでね。」

「大丈夫よ。月…」

月を安心させる為に微笑むも、私の内心は焦っていた。…今、。信

用が出来て有能なのは恋・音々音・霞・華雄……駄目だ。圧倒的に足りない…敵は圧倒、問題は多数…しかも、最近新たな問題が出てきた…

天魔龍の化身

黄巾党とは別に最近、民の間で噂になっている、味方には勝利を、敵には死を与える存在だ…

この存在が…厄介なのは私達…官僚の味方には絶対にならないって事だ…

もし…味方になるのなら…

藁にも縋る思いでそう考えてくると恋が帰ってきた。

「お帰り、恋…黄巾党の本隊を叩いてきてくれたのね。」
「うん…詠…紹介したい人が居る…」

そう言い、恋は連れて来た人を私の前に連れてきた。

………まさか…この男が此処にいるの!?

side out

side 煉籠

恋に連れられて、部屋の中に居る二人の目の前に連れられて来れば、目付きのキツイ眼鏡をかけた少女、賈馱は信じられない者を見るような目付きで、もう一人、柔らかい雰囲気を持つ少女、董卓は良く解らないのか首を傾げて居た。

…此処は雰囲気をよくする為に、フレンドリーな口調でいこう。

「どうも〜藍覇って言いま〜す。此処に仕官したいんですが。」

そう言つと、賈馱は警戒心を剥き出しにして近寄つてきた。

「ちょっと！何であんたが此処に居るのよ！」

「何って…恋に連れて来られて」

「…？」「…？」

「はあ〜…恋と月はしょうがないとして…音々音が、この男の正体を知らない何て…」

呆れた様子でため息を吐きながら賈馱がそう言つと、陳宮が睨みつけた。

「こいつは只の恋殿に纏わりつく馬の骨なのです！」

「…本当に同じ軍師かと思うと呆れるわ…」

陳宮の言葉を聞き、賈馱はため息を吐き出した。

「名前はこのいつも言ったけど、藍覇…こいつの二つ名は天魔龍の化身よ。」

「…！」

賈馱から煉龍の正体を聞き、陳宮は驚きで目を見開いた。

「いや〜それ程でも」

「…褒めてない！」

煉龍がボケて照れる素振りをすれば、陳宮と賈馱の二人に凄まれて突っ込まれれば、恋と董卓はよく解っていないのか首を傾げた。

「しっかし、悪名高い天魔龍の化身のあんたが何で、こんな所に居るのよ。」

「何でって…旅をしていて、恋に出逢って洛陽に来て、恋と一緒に董卓の力になりたくて」

「…はあ？」

まるで信じられない物を見るような目付きで賈馱が恋に視線を向けると、恋はまるで、玩具を取られるのを嫌がる子供の様に煉龍の腕を抱き締めて、涙目で頷いた。

「…はあ…恋…取らないからそんな目をしないで。…で、あなたの目的は？」

涙目の恋を見て、ため息を吐き出せば、恋とはうって変わって敵意剥き出しの視線を向けた。

「目的？さっきも言った通りだが」

…警戒してるな…このチビ駄軍師（陳宮）とは違うな…

「詠ちゃん…この人、多分嘘はついてないよ。」

「騙されちゃ駄目よ。月！こいつは今は油断させておいて、月を殺す気よ！」

董卓と煉龍との間に入れば、殺す気で睨みつけて来た。

「…はあ…信用がねえな…」

「当たり前でしょ！」

…多分…地主の所の噂が尾ひれはひれ胸びれ背びれが付いたんだな。

「…なら…恋を信用してくれねえか？…俺の事は一切信用しないでくれても構わねえ…だが、俺を信用して連れてきて来れた恋を信用してくれ。」

煉龍からは、睨み穿つく様な視線で宣言をし、恋からの捨て犬を拾ってきた様な子供の様な視線を受けた賈馱は、言葉を詰まらせ眉間に皺を寄せれば、数秒後ため息を吐き出した。

「解ったわよ…ただし、何か、不穏な動きをしたら容赦はしないから、覚悟しなさいよね。」

そう宣言をすると、賈馱は少し警戒する様に、董卓の近くに戻れば、董卓は口元を僅かに上げ微笑んだ。

「よろしく、藍霸さん…私は、董卓…董卓仲頼…真「あつ、俺は将来を考えても良いって人だけに真名を教えるんで良いです。」…解りました。」

「あんたねー！折角、月が真名を教えてくれるってのに！」

董卓の真名を遮った事に賈馱が怒鳴って睨みつければ、煉龍は賈馱の怒鳴り声を華麗に右から左へとスルーした。

「…いや、だつてね…俺は将来を考えて良い人間だけに真名を教えなさいって、親から言われてるから…」

「…今時、古風な考えの親なのね。」

煉龍の言葉を聞き、賈馱が渋々と言った表情で引き下がった。

嘘も方便く…さって、華雄さんはどうしましょう…まっ…なるようになるか。

自分の二つ名って良いものか悪いものか判断がつきにくい……だって、俺の二つ名

次は顔合わせです。

…華雄さんの真名…オリジナルにしようかな？

アイデア有れば、感想版で

…あれ、俺は何で將軍の方々と顔を合わしているのでしょうか？…えっ、俺も指揮
まず

一ヶ月近く更新せず申し訳ございません。ネタが中々思いつかない
のと、背後の関係でとてもバタバタして各時間がありませんでした。
更新を中々していないのに関わらず、お気に入り登録している方、
お待たせしました。そして、登録削除しないで待っていただきあり
がとうございます。

これからも完結目指して頑張りますので、長い目で見守ってください。
い。

そして、蒼月璃煌瑠様真名の提案ありがとうございます。ありが
たく使わせて頂きます。

では、本編をどうぞ。

…あれ、俺は何で將軍の方々と顔を合わしているのでしょうか？…えっ、俺も指揮
どうも、煉龍です。
あの後、恋が董卓に俺が職を探している事を教え、董卓軍に入る事
になりました。

「じゃあ、あんたがどれ位強いのか知るために、全員が揃ってから、
試験をするからね。」

…はい？

「あの、試験ってどう言う事ですか？俺は只の兵卒では無いのです
か？」

「あんた、何を言ってるの？飛將軍の口添えで、噂になっている天
魔龍の化身が只の兵卒な訳ないでしょう！」

賈馱の叫びが部屋に響けば、丁度良く、扉が開き二人の女性が入っ
てきた。

「詠、来たで」

「一体、何の用だ。今はまだ隊の鍛錬の時間だと言うのに。」

一人は紫色の髪に豊かな胸をサラシで覆い、太腿の横を外に晒した
袴を履いている猫の様な目付きの女性、張遼
もう一人は、銀髪に鋭い目付き、紫色がベースのチャイナドレスの
スカートを履いた女性、華雄が入ってきた。

s i d o u t

s i d 華雄

まだ、隊の鍛錬の時間だと言つのに……まさか、十常侍が動き出したと言つのか！…なら、この時間に呼び出したのも納得が出来る。

「霞…詠の急の呼び出しをどう思う？」

「大抵の連絡なんかは、朝と夕方の報告の時にするんやから…十常侍が何か工作でもしたんとちゃうか？」

…やはり、霞もそう思うか…

霞と話しながら歩いて入れれば、月が居る部屋の扉の前に着き

「詠、来たで」

「一体、何の用だ。今はまだ隊の鍛錬の時間だと言つのに。」

そう言い、扉を開ければ、詠と月の他に恋と見知らぬ龍が見た事の無い戟を肩に担いでいる男が立っていた。

！？くつ！？何故、あの男を見ただけで、胸が高鳴るのだ！それに生娘でないの、頬も赤くなる！

s i d e o u t

s i d e 煉龍

入ってきた二人の武将、華雄と張遼に視線を向ければ、華雄が顔を赤くして固まったのを見て、張遼は、ニヤリと猫が得物を得た時の様な雰囲気だ笑み、恋と詠はどうかしたのか？と思ひ首を傾げた。

「直葉：あんだ、何部屋に入ってきて固まってるのよ。」

賈馱の言葉を聞き、華雄は直ぐに正気に戻った。

「何でもないぞ。…所で詠：急に呼び出して、どうしたんだ？…まさか、十常侍が動き出したのか？」

顔色を元に戻して、賈馱に質問をするも、華雄はチラチラと煉龍が気になるのか、時折視線を向けては逸らした。

「違うわよ。恋が犬・猫ならまだしも、人間を拾って来たのよ。」

…ちよっと、賈馱さんや…俺の扱って犬・猫とおんなじかい…

賈馱の紹介を聞き、微苦笑をした。

「で、その兄ちゃんは何者なんや？見たところ…只の物乞いって訳じゃないんやろ？」

張遼がそう問いかけると、賈馱が目で、あんだとつと自己紹介をしなさいよ。と促した。

「物乞いって言うより、董卓軍の志願兵です。姓は藍、名は覇、字は鳳って言います。」

「そうなん、うちは姓は張、名は遼、字は文遠や。」

張遼と煉龍が互いに自己紹介を済ました。

「で、もう一人の綺麗な銀髪の人は？」

煉龍の言葉を聞き、華雄が顔を赤くすれば、張遼はニヤニヤと華雄を眺め、恋は表情を曇らせた。

「わ、私は！姓は華、名は雄だ！」

…何かテンパっていますね。華雄さん…

「んんっ！…これで、此処に居る全員の自己紹介が終わったわね。」

一通りの自己紹介を終えると、賈馱は咳払いをした。

「…じゃ、藍鳳…この3人の中の一人と試合をして…」

「ええ、俺は、只の兵卒が良い。」

「五月蠅い！あんた！飛將軍の推薦がどれ程重いものか知ってるの！？」

「えっと…文鎮？」

思いつて言ってもね、

「馬鹿っ！天下最強の飛將軍のお墨付きなんて、滅多に貰えないのよ！しかも、少なくとも恋と五角の腕って事になる奴を何で、只の兵卒にしないといけないのよ！」

賈馱は肩で息をし、呼吸を整えると、この言い争いに終わりが見えないと知ると、ビシッ！恋を指さした。

「恋！本当にこいつがあんたの口添えするに値するかどうかが手合わせしなさい！」

「……………（じくん）」

「はあ…：解りましたよ。」

はあ…：ちよつと頑張りますか。

城の中庭で、恋と煉龍が相對し、その二人を見守る様に遠くで4人の女性、董卓・賈馱・華雄・張遼が立っていた。

「武で生きる物としてはもう少し近くで見たいのだが…」

「そやそや、何故、此処まで距離を取らなあかのや！」

少しでも見取り稽古をしようとする武官二人を賈馱は睨みつけた。

「あんた達！何を呑気な事を言っているのよ！もし、私の予想が合っていたら！」

がぎいいーん！！

こんな試合を近くでまともに見る事は出来ないのよ！」

4人の視線の先、2人の武神が互いに戟で鏝競りあっていた。

「おらあー！ー！」

「はあっ！」

恋が天方戟を薙げば、煉龍も天龍戟・龍牙で薙いだ事で打ち合わった。

煉龍が薙いだ事によって、龍尾が恋に向かって飛んでいくも、恋は戟の石突で弾き、逆に煉龍に攻撃を仕掛けた。

「甘えんだよ！」

煉龍は自分に向かってきた龍尾を龍角で更に弾き返せば、振りかぶり

「おらぁー！」

弾いた時に振り抜いた時の勢いで振りかぶり、勢い良く薙ぎ、龍爪で更なる追撃を恋に加えた。

「……」

龍尾を受ける事も打ち返す事も不可能と判断した恋は上に跳び

「はぁっ！」

重力と自身の力が乗った振り下ろした。

「ちっ！」

ガギーン！

避けたら、避けた時に出来た隙を突かれると判断をした煉龍は、威力あるその戟の一撃を受けるも

「甘い……」

ガッ！

空中からの恋の蹴りを胸で受け、少し吹き飛ばされた。

つう…これが飛將軍か…強い…星より強い…だがな！

「俺は！もつと強い奴から地獄へ叩き落とされたんだよ！！」

ダンッ！

天龍戟を刃元ギリギリまで片手で持ち、天龍戟を持つ腕と上半身を限界まで捻り引き絞り

「穿ち貫くのは龍の角！」

回転を付けた、突きを勢い良く繰り出せば、恋は方天戟の先で、天龍戟の龍角の中心を突き、突きを受け止めれば、その重さに少しだけ表情が曇り、

「叩き落とし粉碎するのは龍の尾！」

空いているもう片方の手で龍尾を薙げば、恋は跳び龍尾での薙ぎを避ける隙を付いて、煉龍は戟を振りかぶり

「薙ぎ刈るの龍の爪！」

勢い良く天龍戟・龍爪を恋に向けて薙げば、恋も薙ぎ打ちあえば、煉龍は半回転して恋に背を向け武器を身体で隠し

「はっ！」

「くっ！」

恋に向け、背後を向きながら石突で突きを繰り出し刃の根元を掴み、

手斧の様に持った。

不意をつかれた恋は腕を石突で突かれ、表情を歪めた…だが、恋もただ攻撃を受けるだけでなく、戟を引き勝負を決めようとし

「断ち噛み砕くは龍の牙！舞龍連撃！」

半回転して、龍牙を恋に突きつけると同時に恋も煉龍に天龍戟を突きつけた。

「互角か…」

「うん…やっぱ、煉龍…強い」

side 華雄

何だ…あの武は…

華雄は信じられないものを見る目付きで、煉龍を見た。

…恋の武は間違い無く強い…私や霞が二人でかかっても引き分けるのは簡単でない…なのに、あの者は…

「なあ…直葉…」

「何だ？霞…」

「疼かへん…？」

「当たり前だ…あの様な試合を見れば…霞…少し付き合ってくれないか？」

武人としての性が…

そう苦笑し、武器を手にすれば、華雄は張遼と対峙し手合わせを始

めた。

side out

side 賈馭

なっ…これが天魔龍の使い…

賈馭は信じられないものを見る目付きで煉龍を眺めた。

「詠ちゃん、藍鳳さんって強いね。」

「そうね…やっぱり、恋が口添えするだけあるわね。」

…この手合わせは失敗した…

もし、あいつが十常侍の手先なら、この手合わせを理由に追い出せる口実を作れたのに…恋と互角ならこいつを追い出す口実は使えない…それに、もしあいつが十常侍の手先じゃなかったら…

「この中庭で手合わせは止めるべきだった…」

…多分、十常侍の手先じゃなく、こちらに引き込めるのなら、あいつは突きを守る為の切り札となったのに…迂闊だった…

「詠ちゃん…どうかしたの？とても難しい表情をして…」

「何でもないわ、月」

…切り札としては使えないけど、恋と同じ強さを持っている奴が居るって事を開示して…牽制するしか方法は無いか……もし、十常侍と繋がりがあれば、寝込みを襲うなり、毒を盛る等して殺せば良い…

「合格よ。今日は疲れたから明日から働いて貰うわよ。」

「明日から働いてって言うけど…俺、何をすれば解らないんだけど…」

結果を聞くために近付いてきた煉龍にそう告げれば、賈馱は少し考え

「なら、優秀な副官と華雄に教えて貰いながら仕事を覚えて、恋…こいつと一緒に町に行つて、案内して…その間にこっちはこいつの部屋を手配するから」

「…(こく)」

「ちよつと、恋さん！何故、俺に引つ付く！ちよつと恥ずかしいんですけど！」

そう告げると、恋は煉龍に引つ付き、町にへと向かつて行った。

藍鳳：私はあんたを信用した訳じゃないわ、だけど…

「月を守る為なら…どんな毒だって飲んでみせるし、どんな卑劣な事でもしてみせる…！」

月を守るため…この優しい幼馴染を守る為に！

…あれ、俺は何で將軍の方々と顔を合わしているのでしょうか？…えっ、俺も指揮

後書きまで見ていただきありがとうございます。

もし、これから皆様にアンケートをする際には後書きに書きます。

その前に、前書きに後書きにアンケート有りと言いますので、感想と共にアンケートに答えていただければ幸いです。

次は、煉龍君初めて働きます。…多分

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7676s/>

世界を渡る旅人...恋姫の世界で天魔龍の化身となる。

2011年9月24日10時24分発行